

亡者だよ！ 全員集合！

ニンジンマン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

某日の某時間帯にダークソウル2のオンラインにいたプレイヤーたちがナザリツク勢の代わりに転移してきてしまった。

プレイヤーたちの大半は亡者化せずに、無事帰ることを願うが……。



「お前いい加減ダクソ2買えって。マジおもしろーから」

大学の講義が終わった後の帰り道、青年は友人にそんな事を言われた。昔からそのデモンズ、ダークソウルシリーズなるゲームについては、青年は興味があつたのだが、難しいゲームということで敬遠していた。

友人の買え買え、という台詞は、もう何度目になるだろうか。青年は思わず苦笑を零した。

「つたく。わかったよ、そこまでいうならちよつとやってみる」

じゃあ、必要なアイテム手に入れたらオンラインで会おうぜ。

そう言った友人と途中で帰路を別れ、青年は近場の家電量販店でダークソウル2を購入すると、彼は早歩きで家へと帰宅した。

自室へと入り、PS4を起動。

ダークソウル2のディスクを挿し、メイン画面を経て青年は早速キャラメイクを始めた。

「まあ、こんなのは適当でいいや」

凝性の人なら1時間以上の時間を費やすキャラメイクを青年は数分で終わらせた。

制作したキャラの見た目は、デフォルト顔を坊主にした素性：騎士のぽつとしないものだった。そして、キャラの名前はMatch。

オープニングムービーの綺麗さに青年は思わず感嘆の声を洩らしながら、食い入るように画面を見つめている。ムービーが終了し、キャラが動かせるようになると、青年は心が躍った。アナログスティックをグリグリ動かしてその場を回ったり、無意味にR1を連打して剣を振り回したり……、そうしているうちに（暗がりのため、仕方ないことではあるが）彼の操作しているキャラが崖の奥、闇に吸い込まれていった。

「あ、死んだ」

虚しい気持ちにしばし駆られた後、いい加減先に進むか、と青年は前方に見える木屋へと進んだ。

何度も死にながら歩を進めていくうちに、朽ちた巨人の森でレベルが20になったところで、青年は地面に描かれた白い文字——召喚サインを見つけた。それを見つめながら、彼は以前友人の言っていたオンライン協力プレイのことを思い出した。

「これに触れればいいのか？」

キャラが召喚サインに触れる——その瞬間、異常が起こった。

青年の自室をまばゆい光が包み込む。突然の出来事に彼は唯々顔を手で覆うことしかできなかつた。



「何だ……何処だ、ここは？」

krageという名前のキャラを操作していた男は周囲の状況に困惑した。

自分は自室でダークソウル2をしていたはずである。外に出た覚えはない。突如、テレビ画面が発光したと思ったら、どういうわけかここにいた。

しかもだ。周りは自分の住居のある高層マンションの並ぶ都心部ではなく、木々が鬱蒼と生える森に囲まれた小高い丘。さらに、自分と同じように困惑した表情の男女が数十、いや数百人以上いる。

コスプレをしているのか、中世風の騎士甲冑やぼろぼろの布切れに身を包んだ人達がほとんどだ。

「あれ？ なんだこれ？」

周りを見ることにばかり気を割いていたせいで気がつかなかったが、ふと自分を見てみると、何やら体に違和感がある。どうやら自分も騎士甲冑を着ているらしく、両手を見れば銀色の小手に覆われていた。

ますますわけがわからなくなっていると、群衆の中の一人がこちらを見ていることに気がつく。その者と目が合うと、相手は「く、く……クラークがいる！」と声を上げた。

「クラীগ?」

クラীগとはあのクラীগだろうか? 男はダークソウルに出てくるボスの一体を想像し辺りを見回すが、何処にもそれらしき者は見えない。

「ほんとだ、クラীগだ」

「うほー、すげー」

周りの人々が自分を見ながら『クラীগだ』ということに、彼はまさかと思つた。

心当たりがあるのだ。彼らの言うクラীগに。

それは自身が必死に魔改造したPS4にぶっ込んだ、自作クラীগMODだ。そしてそのMODを使ってキャラメイクをした自キャラは顔がクラীগそっくりになる。

いやな汗が頬を伝う。

「おい、もしかしてこれって……俺らダクソ2の中に入ってきちまつたんじやね? しかも自キャラとして」

「いや、そんなまさか、ウソだろおい」

「でもよ、これ絶対おかしいだろ。俺、赤毛ロングの女に生まれた覚えがないぜ」

「え……お前、男?」

「はあく、まじ……はまじ」

ゴツイ髭面の男と赤毛の少女の会話をきっかけに、周りが騒がしくなってきた。

「今気づいたんだけどさ、君の頭上になんか書いてあるよ」

「ん?」

先ほど指を指してきて「クラীগだ」、と言つた赤い鎧の騎士の男がクラীগ顔に向かって言つた。

「く……クラীগ?」

「っ!」

驚いた。クラীগというのは自分が作つたキャラの名前だ。しかも今彼が言うには、自分はどうやらそのクラীগと同じクラীগと同じ顔をしているらしい。これはますます先ほどの赤毛少女の台詞に

信憑性が増してきた。

男——現在のクラーゲがテンパっていると、

「おおーい、皆！聞いてくれ！」

ダークソウル2でいう、大鷹シリーズの防具に身を包んだ、『Spa  
rtacus』という文字が頭上に浮いている男が声を張り上げた。  
クラーゲが注視すると、彼は演説者のように両手を広げ、続けた。

「突然、自分の身に置かれた異常事態に大変だとは思いますが、皆で今のこ  
の状況を整理したい！ どんな些細なことでもいい、何かわかったこ  
とがあれば教え欲しい！」

彼の言葉を皮切りに、数十人の男女がその周りに集まり、あーだ  
こーだと話し合い始めた。その中にはゾンビのようなグロテスクな  
身体をした者（亡者状態の者）もあり、クラーゲは認めたくない事実  
を認めざるを得なかった。

「はあく、大変なことになっちゃったなあ」

クラーゲに話しかけてきた男、『Aka』はくたびれた様子でその場  
に座り込んだ。

「アカ、さんはあっちのスパルタカスさんの所へは行かないんですか  
？」

「え？ ああ、俺はいいですよ。どうせこれは夢なんだ。ここで横に  
なって休むことにします」

「そ、そうですか」

よっこらせ、と掛け声を一つ。アカはごろんと寝ころんだ。

現実逃避をしたくなる気持ちは十二分に理解できるが、クラーゲは  
彼と同じ行動をとるつもりはない。彼女（となってしまった）はアカ  
を一瞥すると、スパルタカスの元へと向かった。

おおよそ1時間の情報・意見交換の結果、スパルタカスはここは  
ダークソウル2の世界、もしくは異世界であり、自分たちはダークソ  
ウル2の自キャラとなってこの世界に入り込んでしまった、もしくは  
連れてこられたのだろうという結論に至った。異世界という意見は、  
勇敢な裸の男『724545』から出たもので、その理由は彼が50  
分ほど辺りを見回ってきた故のものである。

「なにやら近くに村らしきものがあつたですぞ。しかも燃えてましたぞ」

「村が？　でも穏やかじゃないな」

凜とした表情をしたクラーゲが目をスツと細めた。

「おうふ」

クラーゲの表情を見て、724545は恍惚とした顔つきになる。

「シコシコさん、その村の場所への行き方は覚えてるか？　可能なら案内してもらいたいんだが」

スパルタカスはここがダークソウル2の世界なのか、それ以外の異世界なのか、これから向かうとうとしている村を見れば結論が出るだろうと確信していた。

「も、もし行つて、そこにボスみたいなのがいたらどうします？」

気の弱そうな亡者が不安げにスパルタカスを見やった。『Matc h』という名の彼はダークソウル2とそれ以前のシリーズも未経験者の初心者で装備も弱い。

そんな彼を安心させるためか、スパルタカスはインベントリからハイドの直剣とターゲットシールドを取り出して掲げると、それを縦横無尽に振り回して力を誇示した。

「安心してください、マッチさん。俺が絶対に倒しますとも。それに……もし本当にダクソ2の自キャラになっているのなら、不死なんで死を恐れる必要はないですがね」

そう言つてスパルタカスはカラカラと笑つた。

「まあ、本当に自キャラになっているのなら平気でしょう」

柄が円状になった長剣とダガーを右手と左手に持ったクラーゲがスパルタカスに続いた。

そんな安易でいいのか、と思ひながらもマッチは「はあ」という気のない返事しかできなかった。





カルネ村というリ・エステイーズ王国に属する村は今、滅びの危機を迎えていた。悲鳴や怒号が飛び交い、力なき村人たちが鎧を着込んだ兵士たちに次々と斬り殺されていく。

村で起きている惨状を目にし、スパルタカスは憤りを感じるとともに、ここがダークソウル2の世界でないことを確信した。

「力ない人々を無残に殺める。これはいけませんねえ、制裁をする必要がありますねえ」

茂みに姿を隠した『seisainokami』という名前のアヒル口の男が、今にも舌なめずりをしそうな表情をしていった。

「セイサイさん、あの兵士を二人で囲んで倒しましょう。私が囮を引き受けます」

隣のクラーゲが何処か冷めた表情で告げる。

彼女のレベルは833とほぼカンストしており、もしこの身体がゲーム準拠の身体能力を持っているのなら、斬られてもダガーでパリイをとるか、盾に瞬時に持ち替えて防げる自信があった。

「いいでしょう。では、1、2、3で行きますよ」

二人が段取りを決めているうちに、兵士は次なる標的に少女を庇う男性を据えた。

「1」

狂気をはらんだ目で男性を見、兵士は歩を進める。

「2」

兵士が剣を振り上げ、その顔に愉悦を浮かべる。

「3！」

茂みから突如として現れた、黒髪の美女にその場にいた兵士たちは目を奪われた。

そして次の瞬間――

「死いいいねえええー!!」

叫び声と同時に兵士の胸部から刀身が生え、それに付随して起こる電撃。

セイサイの放ったレイピアによるバックスタブ攻撃は、見事に兵士

の命を刈り取った。

レイピアをゆつくりと兵士から引き抜くと、セイサイは死した兵士を見下ろし、

「ざまあみろー！ クソが!!」

セイサイの充血した眼に、クラーゲは目を見開いた。

何かおかしい。ついさっきまでただの一般人だった人間が、こんな簡単に人を殺せるのだろうか。そして、自分も逆の立場ならセイサイと同じ状態になっていることが容易に想像できる。

そういえば、ゲームの設定では所持ソウルがないと亡者にそれだけ進行していくのだったか。

クラーゲが自分の所持ソウルを確認すると、わずか1000しかなかった。

このことは目の前の問題を片づけた後にスパルタカスに相談しよう。クラーゲはかぶりを振ると、自分とセイサイを取り囲むように陣形を取り始めた兵士たちを睨みつけた。

カルネ村を襲撃した部隊の隊長であるベリユースは、どこでミスを犯したのだろうかと現状を嘆いた。

茂みから突如として現れた赤髪の狂人と黒髪の美女を皮切りに、どこかの国の騎士のような風貌をした者たちが十数人も出現した。

部下たちは屈強な肉体をした腰巻以外裸の男に殴り殺され、あるいは騎士たちに胸部を刺剣で一突きされ、巨大なクラブで叩き潰され……、気がつけば立っている味方は己一人のみ。そして、自分の率いる部隊を一方的に葬った集団のリーダーだろうと思われる男が、尻餅を付くベリユースの喉元に剣を突き付けていた。

「お前が隊長か。なぜこの村を襲っていた？」

「ひっ、ひiiiiiiiiiiii!!」

スパルタカスがハイデの直剣をぐっと押すと、ベリユースは目に涙を浮かべて悲鳴を上げた。

「お、お、お願いします！ 何でもいたしますから！ い、命だけはあ！」

「ならば、村を襲っていた理由を言ってもらおう」

スパルタカスが顎でしゃくって、他のプレイヤーたちを集まるように言外に言う。プレイヤーたちが集まったところで、ベリユースは口を開いた。

ベリユースの言い分を聞いたスパルタカスたちは皆神妙な顔つきとなった。

「バハルス帝国ってなんだ？」

「スレイン法国ってのもなんだ？」

「リ・うんたら王国？」

「ガゼフ・なんたらかんたらって誰だし」

「知ってる？」

「知らん」

プレイヤーたちが顔を向かい合わせると、口々にそう言った。

そんな彼らの台詞にベリユースは呆氣にとられた。バハルス帝国を知らない？ スレイン法国を知らない？ そんな馬鹿な、と。この者たちは一体何者なんだ……？



結局ベリユースは疑問を解消する間もなく、拘束されて村の倉庫の一つに収容された。

スパルタカスは現在、礼をしたいという村長の案内で村長宅にいる。暫定的なリーダーであるスパルタカスが村長に村で休む許可を得たためか、プレイヤーたちは各々が好き勝手に村を見回っている。

亡者状態で人前に出たくないマッチは、木陰で座りながら先の戦いを思い出していた。結局、戦いに一切参加できずに傍観しているだけだったが、彼の目にはあの場にいるプレイヤー全員が理性なき亡者に見えていた。何故皆、ああも残酷な行動を何とも思わずに行えるのだろうか？ やはりここがゲームの世界だと思っっているのだろうか？

ゲームの世界だから何をしてもいいと思っっているのだろうか……。そんな暗い考えをしていると、すぐそばで足音が聞こえた。その方を見ると、クラীগがじつとこちらを見ていた。

「クラীগさん、どうかしましたか？」

戸惑いがちに訊くと、クラীগは、

「少し、隣に座っても？」

と訊いてきた。マッチは断る理由が特に浮かばなかったため、首を縦に振った。周りの話では、どうやら彼女はダークソウル2の前作のボスとまったく同じ顔をしているらしい。その美貌に思わずマッチは喉を鳴らす。こんな美形のボスがいるのか、もしかしてダークソウルって神ゲーか……などと思っっていると、

「少し訊きたいんですが」

「えっ、あ、すみません」

横顔をじつと見ていたのがばれたのかと思い、マッチは焦った。

「? ああ、突然なんですけど、マッチさんはソウルをどれくらい所持していますか?」

「ソウルですか?」

本当に突然な質問に、マッチは面食らいながらも、3万くらいありますね、と答えた。情報交換時に得た情報によると、所持ソウル量のチェックは、見たいと思えばその量が見えるらしい。マッチもクラーゲへと、そちらは? と訊き返すと、彼女は1000しか持っていないと告げた。

彼女の意図が読めないマッチは、

「どうしてそんな事を訊くんですか?」

「……ちよつと、確認したいことがあつて」

「確認したいことですか?」

「ええ……。マッチさん、ゲーム開始時に老婆たちの言っていたことを覚えていますか? ソウルを落とすなということと、ソウルがなくなればそれだけ亡者に近づいていく云々……」

途中で説明が面倒になり、クラーゲは端折ったが、マッチは理解したのか、はい、と頷いた。

「マッチさんは亡者ですが、理性的で、現代人らしい振る舞いですよね。あの戦いの最中、あなたは震えて見ているだけでしたし」

「す、すみません」

臆病者の自分を責められているのだと思い、マッチは頭を下げる。そんな彼に、クラーゲは慌てて、責めているわけではないですよ、と言った。

「……ですが逆に、生者のセイサイさんはまさに亡者でした。訊いたところ、戦う前の所持ソウルは0だったそうですよ、彼。今は144持つてるらしいですが、そのおかげか、纏っていた狂気のようなものがほんの少し落ち着いていました」

クラーゲの言葉の意味に、マッチは驚いた。それでは、まるでゲームみたいではないかと。

「どうもありがとう、マッチさん。あなたのおかげで一つの疑問が解

けました」

「いえ、どういたしまして」

「お礼といつてはなんですけど、亡者から生者に戻らないってことは、もしかして人の像を持ってらっしやらない？」

「持ってないです」

「そうですか。ならよかった」

クラージェが懐から人の像を取り出すと、それをマッチへと差し出す。

「貰ってもいいんですか？」

「さすがに、いつまでもその姿のままにいるわけにはいかないでしょう」

クラージェが苦笑を浮かべると、マッチはへこへこしながら彼女から人の像を受け取った。彼はおもむろに人の像を自身へと近付けると、それを一気に体へと押し付けた。瞬間、彼のボロボロの身体は綺麗な元の身体へと復活を遂げた。

生者へと戻ったマッチの姿、その顔を見てクラージェは、

(でた)。量産型。パッチ)

と失礼な感想を抱いていた。



太陽の後継者を自負するプレイヤー『YYY(ワイ)』はアイテム整理中に、見慣れないアイテムを発見した。そのアイテムの名は『篝火の剣』と表示されていた。使用回数3回という消耗品であり、見た目はよく見知った篝火に突き立てられているソレだ。使ってみたくてという好奇心に駆られたワイは、早速その剣を村の広場、その中心へと突き立てた。

すると――

『ボツ』

という聞き慣れた音と共に、突き立てられた剣の周囲に火が出現した。やはりこれは、ゲーム内の篝火に突き立てられているあの剣なのだろうか。

疑念は絶えなかったが、火を見ているとどういいうわけか暖かい気持ちになる。今はこの火の暖かみを享受しよう。

ワイは膝を折って篝火の前に座り、一息ついた。

「ワイさん、今のどうやってやったんすか？」

いつの間にか向かいに腰掛けていたプレイヤーが訊いた。あちらも篝火に惹かれて座ったようだ。ワイはそのことに少し気分を良くすると、インベントリのアイテム欄にあると教えた。

「どうだ、あつたか？」

「あるつす。ほら、これ」

そう言つて、『Yoroi (ヨロイ)』という名の女プレイヤーは、篝火の剣を見えるように掲げた。

「おそらくそれは3回限りの貴重なアイテムだから、無暗に使わない方がいいかもしれんな」

「げっ。これ、回数に限りあるんすか」

ヨロイは眉を顰め、露骨に嫌そうな表情を作った。アイテム欄から確認してみると、確かに3という使用回数制限の数字が篝火の剣についていた。

「有効時間を検証したいところだな」

ワイはそう呟いた。ゲームの中の篝火のようにならずと燃え続けていれればいいのだが、ゲームの世界かどうか怪しいこの世界では、どうなるかはわからないのだ。数分、数十分後に消えてしまうかもしれないし、もしかしたら何日、何十日ともつかもかもしれない。

彼はこの篝火を検証するために、しばらくこの村に厄介になろうと決めた。と、同時に周りが騒がしくなってきた。どうやらヨロイ以外のプレイヤーたちも篝火の存在に気づいたらしい。

「おおー、篝火いー」

「やっぱりここって、ダクソの世界じゃねーか」

「ああ、あつたけえ」

「へへっ、ありがてえありがてえ」

十数人のプレイヤーたちがぞろぞろと篝火へと集まってく。それに対して、篝火の前に座れる周囲はそんなに広くはない。

結果、渋滞を起こした。

「お前いつまで座ってんだよ」

「次座るの俺な！」

「早くかがらせろー！」

がやがやと喧しいプレイヤーたちに、篝火の前に座っているヨロイが怒った表情をして、

「みんなー！　かがりたければ自分たちで篝火作ればいいじゃないっすかー！　アイテム欄に剣があるっすよー！」

と叫んだ。自分のことは棚の上にあげて言う彼女に、ワイと彼女のやり取りを見ていた者たちからブーイングが起きる。が、それを見ていなかった者たちは、何も考えずに、我先にとその場に篝火の剣を突き立てていった。

『ドスドスドスドス』

『ボツボツボツボツ』

計5人が5つの篝火の剣を、ワイの作った篝火の近くに突き立てた。

それを見ていたヨロイは、うなじに手を当てながら、

「うわー、超もつたいねえ」

篝火の剣を使わせた元凶が何言ってるんだ。ワイを含めた皆がそう思った。



村長宅の一室で、スパルタカスは村長からこの世界の国や情勢についての情報を聞いていた。ちなみに、自分たちの出自について訊かれた時は、『とんでもなく強い老婆のお化けに魔法で飛ばされてきた』と



いう小学生が考えたような言い訳をした。したのだが、村長は『そう、そうでございますか』などといって納得してしまった。納得したならそれでよし。と、スパルタカスは早々に自分たちへの質問の流れを断ち切ると、村長に質問攻めを開始したのだ。

「——でありまして、こちらがリ・エステイーズ王国直轄地の城塞都市エ・ランテルでございます」

「なるほど。では、まず近場の都市はそのエ・ランテルという都市になるのですかね？」

「はい。ですので、いろいろな情報が欲しいのでしたらまずは——」

そこまで言って、村長の声は扉を開け放たれて出た、けたたましい音に遮られた。

「村長！・ 兵士の皆様が奇妙な行動を起こしておられます！」

扉を開け放った村人の第一声に、スパルタカスは顔を手で覆った。どっかの馬鹿たちが浮かれて問題でも起してるのかと考えると、先が思いやられた。

「篝火……だど？」

村人の報せを聞き、広場へと戻ったスパルタカスは絶句した。

村へと来た時は篝火なんてものはなかったはずである。それが6箇所も……。さらにいうと、自分についてきてくれたプレイヤー17名全員が篝火の前に座って休息を満喫している。

いったい何時の間に篝火なんて代物が出現したのだろうか。いや、それよりもだ……。スパルタカスの内心に再び疑問が湧く。

（篝火があるということは、ここはダクソの世界なのか？ それとも誰かが戯れに作った偽物か？）

「スパルタカス様、あの……兵士の皆さまはいったい何をされているのでしょうか？」

戸惑い気味に村長が尋ねた。ダクソプレイヤーでない者から見れば、プレイヤーたちの行動は謎だ。寒い季節ならば別だが、現在は半袖でも十分なくらいの気温で、普通は暖を要しない。

「まあ、その……我々の祖国の儀式みたいなものです」

ただの出まかせ、ウソだ。正直、村長に構っていられる状態じゃない。

スパルタカスは近くの篝火まで歩いていき、座って篝火を見つめている女に声をかけた。今すぐにでも、これらの篝火について訊きたかった。

「クラーゲさん」

「スパルタカスさん……。お疲れ様です。話し合いは終わったんですか？」

クラーゲの質問にスパルタカスは首を振って篝火を指し、村の人が驚いたみたいで、と苦笑を浮かべた。クラーゲは彼の言葉に、なるほど、とだけ言う顔と顔を逸らした。

仄かな暖かさを放つ篝火を見ると、彼女は急に睡魔に襲われた。――

今日はとんでもないことが起き過ぎた。

「すみません、少し、寝ます……」

「え、ちよっ」

会話をそっけないやり取りだけで強制終了されたスパルタカスは慌てた。

「クラーゲさん？ クラーゲさん、クラーゲさーん」

クラーゲの名を何度も呼ぶが、どうやら彼女は寝こけることに決めたらしく、一向に返事をしない。

スパルタカスは諦めのため息をつくとき、彼女の後ろに座るヨロイへと視線を向けた。

「ヨロイさん、少しいいですか？」

声をかけると、クラーゲの背後、漆黒の騎士がスパルタカスの方を振り向いた。

「ん〜？ なんすかー？」

巨漢が着るような漆黒の騎士甲冑一式——レイムシリーズ（兜以外）を着込んだ女は、軽い口調で答えた。

「なっ……」

ヨロイの声に村長は驚愕した。声を出しはしなかったものの、彼女の声を聞いた村人も同様だった。彼らを驚かせた要因は2つあった。それは、ゴツイ鎧を着ていたのが女性だったことと、振り向いた彼女がかなりの美人だからだった。金髪蒼眼で、髪をポニーテールにした娘だ。ドレスでも着せたら、貴族の令嬢と見紛うほどなのではないだろうか。

「んー？」

「っ……し、失礼しました、騎士様！」

ヨロイに見られた途端、彼女の気分を害したと勘違いした村長は、額に汗を浮かべて謝罪をした。そんな村長を、いきなりどうした、と思いつながらヨロイはただじっと見つめる。

「……」

「ヨロイさん、この篝火はどこから？」

と、ここでスパルタカスが二人の間の空気をバツサリと切った。スパルタカスにとっては認知しないことではあるが、村長は助かったと、胸を撫で下ろした。

「篝火はワイさんが見つけたつすよ。というより、篝火の基となるアイテムつすけど」

「アイテム？」

「アレつす、アレ。あの剣を地面に突き刺すと、その周りが篝火になるみたいで」

ヨロイが指したのは篝火に突き立てられた剣だった。

「篝火の剣っていうらしいつすよ。たぶん、スパルタカスさんのアイテム欄にも入ってるんじゃないつすか？」

言われてすぐに、スパルタカスは当該アイテムを探った。すると、それを最下列で見つけた。

(な、なんだとおー!!)

「あの、スパルタカスさん」

膝を折ってがっくりと頭垂れるスパルタカスの頭上から、マッチが遠慮がちに声をかけた。

「マッチさん。……どうしました？」

「どうかしたってわけではないんですけど……。せつかく村も無事に救えて、篝火も手に入れられたわけですし、丘で待ってる皆にこのことを教えた方が良くないかなって」

「ああ……、それもそうですね」

そう言ったスパルタカスは立ち上がると、マッチの肩に手を置いた。

「え？」

「マッチさん、よろしくお願ひします」

「えっ……」



驚くべきことに、小高い丘を埋め尽くしていた100名以上のプレイヤー、そのほとんどが姿を消していた。残っているのはアカと、彼

同様にぐうたらしている者たちが12名だけ。

マツチは急いで、プレイヤーの一人——アカへと声をかけた。

「すみません、あの、他の人たちは一体どこへ？」

「……さあね。俺、ずっと寝てたんで」

横になつていた身体を起こし、ふあく、と欠伸をするアカ。マツチはその姿にイラつとしたが、心を落ち着けて、他のプレイヤーへ先ほどと同じ質問を繰り返した。

「あ〜……そのことな……」

マツチの質問に、黒髪ロン毛の男プレイヤーは言い淀んだ。

彼はしばし俯いていたが、話すことが纏まったのだろう。槍を使つて地面に何やら描き始めた。

『†Artorius††Ornststein†』

男が描いていたのは文字だった。どうやらプレイヤー名っぽい。マツチはそう思うと同時に、痛い痛い痛い、と内心呟いた。

マツチの齡20の人生経験上、男なら誰でも通つただろう道を察した。特にプレイヤー名の前後に『†』を入れる奴は、大体がお子ちゃまだ。もちろん、精神的に、という意味で……。彼は男が次に何を言うのか悟った。

「まずこの二人が、要するに……Aの字が『この世界は絶対にダクソの世界か異世界。つまり、ダクソ界で最強と言われた僕は最強』つって、次にOの字が『ダクソ界で最強の玄人たる俺が、異世界でTueee出来ないわけないじゃん』とかぬかし始めてよ」

言葉を紡ぐ毎に哀愁を帯び始めた男に、マツチは同情した。

「これがまた、どういうわけか同レベルの奴らが結構いてよ……。誰かが『最初に一国落とした奴が最強』とか言いだすもんだから、あいつら、エライはりきつちまつて」

とは言つても大半の奴らは便乗で、馬鹿を人身御供にこの世界の情報収集に出たみてーだ。と、男は締めくくつた。

マツチはこんな未知の状況でも粹がるお子ちゃまに、深い深いため息をついた。

「そうだったんですか」

「おう……」

「大変でしたね」

「おう……。まあ、俺は見てただけなんだけどな」

この男、止めようとしなかったのか。マツチは男に非難めいた視線を向けたが、用件を思い出して再びため息をつく。ここに残ってる連中もろくでもない奴らなんだろうな……。

そうは思いつつも、マツチは暫定的なリーダーのスパルタカスに頼まれたことはしっかりと果たすつもりだ。人の住む村を襲う蛮族兵士がいるような世界で、頼まれごとをすつぽかしたせいであの集団から仲間外れにされたら堪ったものではないからだ。

マツチは嫌々ながら男と、ぐうたらするアカ達に村のことや篝火のことをしっかりと伝え、自分に付いてくるよう促した。



王国戦士長ガゼフ・ストロノーフとその部下たちは警戒を強めた。馬に跨る彼らの視線の先、カルネ村の広場からは火が上がっている。そして、その周囲には様々な鎧や甲冑を纏った兵士と思しき者たちがいた。

ガゼフは集団の中から頭一つ抜け出して先行すると、赤い軽装をした男の隣に、この村の人と思われる者が二人いることに気がついた。篝火に屯するプレイヤーたちからの視線が集まる中、ガゼフは警戒を解かず、馬上から中年の村人へと声をかけた。

「私はリ・エステイーゼ王国王国戦士長、ガゼフ・ストロノーフ。この近隣を荒らしまわっている帝国の騎士たちを討伐するために、王のご命令を受け、村々を回っている者である」

彼の言葉に、中年の村人——村長が、王国戦士長……。と、驚いた表情で呟いた。

「この村の村長だな。隣にいる人物は一体誰なのか……。そしてこの

焚火の周りに集っている騎士たちが何者なのか、教えてもらいたい」  
ガゼフの問いに、村長は村で起きた惨劇とスパルタカスたちが村を救ったことを説明した。村長の説明にガゼフは目を一瞬大きくすると、馬から降りてスパルタカスと相対した。

「この村を救っていただき、感謝の言葉もない」

ガゼフはそう言つて、スパルタカスへと右手を差し出した。

王国戦士長と言うのは、おそらく軍のトップの地位だろう。そんな位の高い人間が礼儀正しく、実直で真面目な対応をすることに、スパルタカスは少し気を良くした。

「いえ。我々としても、罪のない弱者が一方的に斃り殺されるのを見過したとあっては、寝覚めが悪いですからね」

本当は情報収集と検証が目的だったのだが、わざわざ心証が悪くなるようなことを言う必要はない。そう思ったスパルタカスは、信用を少しでも得るために大鷹の兜を外した。すると、黒い髪を丸刈りにした端正な顔が現れた。

「！(若い……)」

ガゼフは驚愕した。スパルタカスはガゼフの見立て通りなら、少なくとも自分と同等の力を持った男だ。それゆえ、年のほども同じだろうと思つてはいたが、見た感じでは齡20ほどの若者。おそらくこれから成長していくことだろう。

(将来は歴史に残る英雄になるかもしれない……)

「重ね重ね礼を言う。この村を救っていただき、本当に感謝する」

ガゼフとスパルタカスはお互いにしっかりと右手を交わしあつた。

右も左もわからぬ世界の中では、味方は多い方がいい。しかも相手は一国の軍の戦士長。スパルタカスはどうにかして、彼の懐に潜り込めないかと考え始めた。そしてちょうどそんな時だった。一人の兵士がガゼフの元へと駆けてきた。

「戦士長！ 周囲に複数の人影。村を囲むような形で接近しつつあります！」

斥候の言葉に緊張が走る。村長と村人は怯えた表情をし、不安げにガゼフを見つめる。

「村長、スパルタカス殿。少しよろしいか？」



ガゼフは村長に村民は一つの建物内に避難するように命じ、自分たちは相手の様子を窺える家で相手の出方を探っていた。

「一体何なんだ、あいつら」

ガゼフについて来たスパルタカス、その彼について来たクラীগがぼそりと呟いた。彼女は切れ長の目をすっと細め、ゴーレムのような見た目の天使を見つめた。かの「黄金」とはタイプが違うが、絶世の美女たる彼女に見劣らない美貌を持つクラীগに、彼らは息を飲んだ。だが部下たちとは違い、ガゼフのそれは別の意味合いだった。

ガゼフにとって、クラীগの纏っている雰囲気は異常だった。まるで最強の存在を見ているかのような、彼女はそういった絶対的な強者としての雰囲気醸し出している。

それに彼女だけではない。ワイと名乗るバケツ頭の白銀の騎士や、ヨロイという名の漆黒の騎士（兜装着済み）、シコシコという名の腰巻しか身につけていない変態等……。自分やスパルタカスよりも強い存在が、彼を除く15名中14名。よってこの場には英雄級が少なくとも16人もおり、しかもそのうちの4名は圧倒的な雰囲気を持つ存在。はつきりいって、もし彼女らがこれから起こるであろう戦いに参戦してくれるのなら、敵が何であろうと勝利は固いだろう。

そう、相手が例えば優秀な魔法詠唱者マジックキャスターで構成されたスレイン法国の特殊部隊であろうとも。

「これだけの魔法詠唱者マジックキャスターを揃えられるのはスレイン法国、それも神官長の直轄特殊工作部隊、六色聖典のいずれかだろう」

スレイン法国……か。クラীগはぼそりと呟き、スパルタカスを手招きした。

「クラীগさん、何か？」



「地図プリーズ」

手のひらを上にし、くいくいと手招きする。

スパルタカスは村長から拝借した地図を取り出すと、それをクラージェへと渡した。彼女はしばしそれを見つめると、ふうん、といってそれをスパルタカスへと返す。

(やべえ、文字読めないからどれがスレイン法国か全くわからん。メモするか振り仮名くらい振っておいてくれ)

スパルタカスの気配りの無さに呆れ、クラージェは小さく嘆息した。「スレイン法国に何か心当たりでも？」

横から見ていたガゼフが問うと、クラージェは口の端を僅かに引き攣らせた。

「いいえ。にしても、一国の軍の頭を殺しに来るなんて……。もしかしてこれから戦争にでも発展する？」

クラージェの台詞にガゼフは頭痛を覚える。

リ・エステイーゼ王国はただでさえバハルス帝国と戦争状態になっているのだ。そんな状態でスレイン法国と戦争をしようものなら、挟撃されて確実に敗北するだろう。さすがの貴族たちも、それを望むほどバカではないだろう。

ガゼフは首を振って、クラージェの質問に否と答えた。

「ならばよし」

言うが否や、クラージェは銀色に光る何かを手にとって片膝をついた。その場にいた者たちは一体何をするのかと彼女を注視したが、次の瞬間、プレイヤー以外のガゼフ達は目をむいた。なぜなら、彼女が突然木箱にその姿を変えたからだ。

まさか魔法詠唱者マジックキャスターだったのか!? と、彼女を同職だと思っていたガゼフは、驚いて口を半開きにしたまま固まった。

「敵の具体的な数が把握できないまま、戦うのは危険な事だと皆はわかっていると思う」

木箱が喋る。シユールな光景だが、プレイヤーたちは彼女が何をしようとしているのか察した。ソウルシリーズでのよくある死因に、数の暴力によるリンチがあげられる。『ごり押しダメ、絶対』はソウルシ

リーズプレイヤーの常識だ。まずは敵数と配置を調べ（覚え）、それから本番の戦いを仕掛ける。

しかしクラージェの考えは、彼らの期待しているそれではなかった。危険な偵察役を買って出るのではなく、単純に擬態して敵に奇襲を仕掛け、美味しい所をいただこうとしていてるだけだった。

この世界でもダクソ同様に、何かを殺せば、殺した者のみにソウルが手に入る。そしてソウルは理性を保つために必要不可欠な神秘所持しているボスソウル等を、保険として持っておきたい彼女の狙いはソウルの横取りだった。

「おふっ。クラージェ殿が行くなら拙者もついて行きますぞ」

「クラージェ殿、私も同行しよう」

「ワイさんが行くならアタシも」

だが残念なことに、クラージェの目論見はすぐに破綻する。シコシコとワイ、ヨロイの3名がついてくると言い出したのだ。3名はクラージェと同じように銀色のタリスマンを手に取ると、シコシコは仏壇の石像に、ワイは壺に、ヨロイはネズミの石像に姿を変えた。

「お前らそれ、絶対にはれるから」

スパルタカスが突っ込みを入れてやめさせようとするが、アホなヨロイが、

「大丈夫っすよ！」

などと言って民家から出て行ってしまった。そしてそれをクラージェが追いかけて、クラージェをシコシコとワイが追いかける。

あいつら余計なこと仕出かさないだろうな、とスパルタカスは痛む腹を押さえた。

ガゼフの潜む村の包囲は首尾良くいつている。包囲網を狭めて行き退路を断つ。そして、残るは詰みだ。だが相手はあの王国戦士長。油断はせずに慎重に戦う必要がある。

陽光聖典隊長ニグン・グリッド・ルーインは、部下とともに徐々に村までの距離を詰めていった。相手がなかなか村から出てこないことにニグンは訝しんだが、それならそれでもよい。村ごと消すまでだ。

この時、ニグンには余裕があった。

「ニグン隊長、少しお耳に入れておきたいことが……」

「なんだとっ!？」

しかし、その余裕は部下の一報で跡形もなく消えた。



〜ニグンが驚く十数分前〜

常識的に考えて、ネズミを模った石像が独りで動くことなどあるだろうか？ 答えは否だ。

陽光聖典の隊員は急に村の一面から飛び出してきた、怪し過ぎるそれと対峙した。

「な、何者だっ！ 貴様！」

隊員が叫ぶと、その石像はすーっとスライドしながら村から森へと離れていった。そしてその像に続くように、木箱、壺、仏壇が石像と同様の動きで村を出ていく。

呆気にとられていた隊員だったが……、

「まさか魔法詠唱者か!？」

マジックキャスター

マジックキャスター

もしあの変なものたちが魔法詠唱者による擬態なのだとしたら、非常に厄介なことになる。おそらくこちらの裏を掻こうというのだろう。前方のガゼフを相手にしている最中に、横から魔法の一撃でも貫

うとなつたら手痛い損害が出る。

そう考えた隊員は、天使を攻撃に向かわせた。と、同時にぎよつとした。ネズミの像がこちらをじつと見つめているのだ。そしてその像から粒子状の何かが散り始め……。

気がつけば、彼の召喚した天使が消滅していた。天使のいた場所には、3本の矢のようなものが落ちている。

「な……に……う？」

「ぼばーんー」

軽快な女の声。

声を放ったのはネズミの像……だった漆黒の騎士からのもの。その両手にはいつの間にか弦が3つもあるボウガンが握られていた。それを見つめ、隊員は息を飲んだ。

『ドドドッ』

「がっ！ (馬鹿な……俺の障壁が……)」

ガラスが砕ける様な音と共に、隊員の身体が仰向けに倒れる。彼の胸には3本の矢が刺さっていた。隊員の額からは大量の汗が流れ、口からは血が毀れる。

「よしっ、まずは一体！」

薄れゆく意識の中、隊員が最後に見たのは、漆黒の騎士と仏の御尊顔だった。

「貴公……」

ワイが兜の奥で眼光を鋭くした。彼の視線の先には、小さくなっていく敵兵の後ろ姿が……。

「わ、悪かったつすよ。次はもつとうまくやるつす！」

「いや、次とかもうないんで……」

呆れた声でクラーゲがぼやいた。

敵の仲間に、事の一部始終を見られていた。自分たちの存在はすでに敵全員の知るところだろう。

まったくどうしたものか……、とクラーゲは額を手で覆った。敵は

こちらの存在をすでに知っている。もう奇襲は不可能とみていいだろう。

「ふむふむ……ややつ、男でやんすか」

シコシコが、死んだ敵の兜を外して言った。

「男だからどうしたというのだ？」

ワイが訊くと、シコシコは、

「ヨロイ殿が殺めたのが、女性でなくてよかったと思っただけですぞ」

シコシコのその発言に、クラージェのイライラはピークに達した。

「……戻りましょうか」

努めて平坦な声で、クラージェは3人へと言った。そして3人を一睨みすると、来た道を引き返していった。



よければ雇われないか？

というガゼフからの申し出に、スパルタカスは内心で、

(キタアアアアアアア！)

と、歡喜の雄たけびを上げていた。

この世界での己の立ち位置は、身元不明の放浪者。このような肩書では社会の中に溶け込むことはできないだろう。だが、戦士長に雇われている身となれば話は別。この国での情報収集がしやすくなるはずだ。

しかし自分だけが抜け駆けしてしまつては、他のプレイヤーたちから反発が出るだろう。それはなるべく避けたいものだった。

「戦士長殿、それは私だけに対してでしょうか？ それとも——」

「無論、貴殿ら全員だ。しかし、そうになると一人ひとりの報酬は低くなつてしまわれるが」

「具体的にはどのくらいで？」

乗り気なスパルタカスの質問に、ガゼフは口元を緩めた。

「今は持ち合わせがない以上具体的な数字は言えぬが、貴殿らが等分しても納得するだけの額……とだけ言っておこう」

「ほお……」

スパルタカスは顎に手を当て、熟考している体を装った。本当はガゼフからの提案は願ったりかなったりで、返事は無論『YES』なのだが、仮とはいえリーダーをやっている身だ。

スパルタカスは、偵察へ行った4人以外を招集すると、全員にガゼフからの申し出を伝えた。

「人数分わけることになるが、戦士長殿は望む金額を出してくれるぞうだ。俺は提案に乗ろうと思っっているんだが、皆はどうだ？」

そう言っつてプレイヤーたちの顔を見回す。すると、周囲が色めき立った。

「いくら位貰えるんだろうな？」

「一生遊んで暮らせる額だったら、俺、この世界の風俗で一生暮らすわ」

「母ちゃん、俺、やっと仕事見つけたよお！」

「何とかセイテンつてやつ倒したら、たらふく飯食いてえぜ」

「俺、マイホーム建ててー」

各々が言いたい放題言っつていると、スパルタカスは手を大きく2回叩いて、プレイヤーたちを黙らせた。

「それでは皆、答えを聞かせてもらおう」

スパルタカスがもう一度プレイヤーたちを見回すと、彼らは全員が首を縦に振った。

「……決まりだな。御助力感謝する、スパルタカス殿」

ガゼフは窮地の状況から一転しての、大幅な戦力増強が出来たことに、自分はまだ運に見放されていないと喜んだ。

「いいえ、こちらこそ。身元不明同然の我々を雇っていただき、感謝の言葉もあります」

二人の台詞に、ガゼフの部下たちから「おおー」という歓声上がる。彼らはプレイヤーや陽光聖典らと比べれば弱者ではあるが、榮譽ある王国戦士長の配下の戦士だ。戦力眼なら多少はある。彼らはプ

レイヤーたちが只者ではない戦士であることは、ひしひしと感じていた。

「騒がしいみたいだけど……、何かありました?」

扉が開き、クラージェが顔を出した。彼女は不機嫌そうに米神を押さえると、置かれている椅子にどかっと座った。続いて、ワイたちも民家の中へと戻ってくる。

「おお、クラージェ殿。その件に関してはそちらの報告の後にも。して、如何だったか?」

ガゼフが少々控え気味に問うた。するとクラージェは、深いため息をひとつし、

「……失敗した」

「なにっ!?!」

ガゼフは驚愕した。彼にはクラージェほどの者が、偵察をしくじるとは思えなかったのだ。

(六色聖典……私が思うよりも強大な敵なのかもしれんな)

「いや、失敗失敗」

ガゼフの背後にいたヨロイは、そう言いながらクラージェの隣に腰掛け、漆黒の兜を脱ぎ去った。黒の中から現れた眩い金に、ガゼフたちは目を細め、感嘆の声を洩らした。

「まったく……」

感動をしている王国兵士たちをよそに、クラージェは腕を組んで足をトントンと鳴らした。彼女はきつとヨロイを睨みつけると、

「貴女、全然反省してないよね?」

がたんつ、というけたたましい音を立ててクラージェが立ち上がった。

「うえっ……、な、何すか、突然……?」

眉間に皺を寄せるクラージェに、ヨロイは怯えた顔をして上体を引いた。

一触即発の状態だ。この二人が強いと知っているスパルタカスと強いと思っているガゼフは、このまずい状況に冷や汗をかいた。だが、クラージェはヨロイを少し睨んだだけで、再び椅子へと乱暴に座つ

た。

(くっそ！ くっそ、こいつの顔可愛過ぎんだろ！ どうやって作ったし！)

ヨロイの顔がストライクゾーンのだ真ん中だったため、クラীগは途中で気恥ずかしくなってしまう、怒るに怒れなかった。彼女は再び視線をヨロイへと向け、すぐに視線を反対側へと向ける。凄んでおいて、何も言えなかったのが気まずくもあり、恥ずかしい。自分で耳が熱くなっているのを、彼女は自覚した。

クラীগは外していた白王の冠を頭につけると、出口へと向かって歩き出した。彼女の行動を不審に思ったガゼフが声をかける。

「クラীগ殿、一体どこへ？」

その声にクラীগは扉の前で止まり、振り返った。

「王とは常に、孤独なものなのだよ(ソロプレイしたい)」

などと言ってクラীগは民家から出て行った。

本来なら止めるべきなのだが、ガゼフは彼女の言葉、その意味する所に動揺を隠せなかった。

(王……だと？ 彼女が王？ だがしかし、彼女がどこかの異国の王ならば、この者たちの強さに説明がつく。おそらく、兵を統率するスパルタカス殿が私と同じ戦士長かそれに近い身分、そしてワイ殿ら3人が側近なのだろう。一応、スパルタカス殿に確認をとるか)

ガゼフは大きな勘違いをしたまま、それが正しい見解だと思い込んで口を開いた。

「スパルタカス殿、クラীগ殿が王と言うのは……」

「忘れてください、忘れて差し上げてください」

スパルタカスはさかさずフォローの言葉を紡ぐ。クラীগの発言は彼にとって予想外だった。ある程度は常識人(MOD)を使用しているのは置いといて)だと思っていた彼女が、まさかの患者さんだったのである。

だがスパルタカスのフォローは意味をなさず、勘違いは広がっていく。

「なっ、なんとっ！」



ガゼフは自身の予想を確信に変えた。

(忘れろということとは、それだけ先ほどの彼女の発言が危ういということ。やはり彼女は王なのだ。確かスパルタカス殿はドラングレイグという国から来たと言っていたな……、聞いたこともない国だが……。つ！ まさか亡国の王か?)

「あの……ガゼフ殿、先ほどのこと。本当に忘れて差し上げてください」

念を押して言うスパルタカスに、ガゼフは事の重大性を理解した。彼はスパルタカスに、

「誰にも言いませんとも、もちろんその事は部下にも徹底させよう」

と、真剣な表情で訴えた。

(うわ、この人絶対勘違いしてる)

これ以上何か言っていると、余計新たな勘違いが起きそうな気がした。そう思ったスパルタカスは、作戦について話し合ひましょう、とこの話を切り上げて平原にいる陽光聖典を一瞥した。



天使を一撃で葬るクロスボウ持った魔法詠唱者だど？ マジックキャスター しかもその者の姿は、まるでかの伝説の『黒騎士』のようだというではないか……。

部下の報告を受けたニグンが驚いたのは一瞬。今はその危険な敵の分析へと思考を割いていた。無論、包囲に関しても抜かりはない。

「面妖な……」

今回の作戦は完べきはずだ。ガゼフは本来の装備ではなく、配下の者も少ない。それに対して我らは万全の状態であり、しかもかの主天使まで奥の手として持っている。負けるはずがない。

はずがない、とは思うのだが確信が出来なくなってきた。

なぜこんなにも嫌な胸騒ぎがするのだ？ ニグンは村から急に現

れたという漆黒の騎士の存在に、大きな不安を抱き始めた。

ガゼフとスパルタカスが意見を言い合った結果、作戦は2部隊による挟撃で決まった。内容はいたってシンプルなもので、騎兵で機動力の高いガゼフの部隊が包囲を抜けて外側へと回り込む。次いで、スパルタカスらが弓で攻撃しながら接敵。2部隊で近接戦に持ち込み、敵魔法詠唱者部隊を殲滅するというものだった。

魔法詠唱者<sup>マジックキャスター</sup>は魔法詠唱者一人につき、天使が一体。天使の強さや能力を知らないガゼフ達は警戒せざるを得ず、基本的に戦う時は複数人で天使と戦うというルールを設けた。

「では、スパルタカス殿……御武運を」

「ガゼフ殿こそ、御武運を……」

民家の外。スパルタカスが敬礼して見送る中、馬に騎乗したガゼフは二十余名の配下と共に、敵陣へと向かっていった。

約10分後に行う挟撃作戦がうまくいくかどうか未知数だが、今自分のやれることだけはやっておこう。スパルタカスはクラীগエのおかげで閃いた悪事を実行すべく、プレイヤーたちを広場へと集めていった。

クラীগエ以外が集まると、スパルタカスはちよつと提案したいことがある、と前置きし、

「俺はガゼフ殿の勘違いを最大限に利用しようと思う」

と告げた。

「勘違い？」

ヨロイが首を傾げて尋ねる。それにスパルタカスは口端を上げて答えた。

「ガゼフ殿はクラীগエさんの台詞から、彼女をどつかの国の王様だと勘違いしている」

「えっ、マジっすか？」

「ああ」

スパルタカスの首肯に、ヨロイ以下この場にいるプレイヤー全員が引いた。ネタを知っているプレイヤーたちからすれば、あの台詞はた

だのネタであり、それ以上でもそれ以下でもないのだが、知らない人間からすれば本気で言っているように見えるのだろう。そういうことにおこう……と、この場の全員が思った。

「だから、クラーゲさんにはドラングレイグという架空の国の王、という立場を演じて貰おうと考えている。配役は後で決めるとして、とりあえずは、俺たちは彼女の腹心の部下だ」

「仮にそれをして、彼女と私たちに何のメリットがあるのだ？」

両腕を組んだワイが、低い声色で言った。彼はこういった、騙りが嫌いなのだ。

「まず一つ目、身元不詳人だった肩書がドラングレイグ王国騎士団員、とかになる」

「中二乙」

「やかましい。それで二つ目、もっと上手く騙せれば、王国の上の連中と会う機会が得られる」

「……続けてくれ」

「3つ目、さらにうまくいけば、そういう連中とコネを作って、いろいろな所からの情報を手に入れられるようになる」

「デメリットは？」

「ガゼフ殿がどう勘違いしたかによりませんが、最悪、不法入国による国外退去といったところかと。彼を見た限り、さすがにそれはないとは思いますが……」

「ふむ……」

スパルタカスの提示したメリットは、ワイにとって非常に魅力的なものだった。彼が今一番欲しているのは、この世界の情報だ。この国の上役連中ともなれば、それに関して事細かく知っていることだろう。

ワイがスパルタカスの言うメリットを吟味していると、

「おもしろそーだから、リーダーの意見に賛成！」

などとヨロイが軽いノリでスパルタカスの提案に飛びついた。そして、ワイに向かってぐつと親指を立てる。

「貴公、何も考えてはおらんだろう」

ワイは呆れて、そのバケツ頭を左手で押さえた。

「とーぜん！」

腕組みして胸を張る彼女に、ワイは深いため息をついた。

「ん〜、まあ、みつともない流れ者よりはましか」

そう言つてプレイヤーの一人がヨロイの隣に並ぶ。

「クラীগゲ殿が王でござるか……デユフフフ、いや、女王様ですな、デユフ」

さらにその隣にシコシコが並ぶ。

「あの戦士長さんの糞真面目そうな人柄なら、大丈夫だろ」

茶髪ゴリラ男のプレイヤーがシコシコの隣へ。そして彼に続いて初老の髭男爵が、そのまた彼に続いて道化師顔の男が……。

と、繰り返し回数。気がつけば、ワイとスパルタカスらが向き合つて1対14という構造になっていた。

「ワイさん、どうします？」

スパルタカスは勝利ゆえの余裕を持つて訊いた。

ワイは小さく嘆息すると、仕方あるまい、と言つて、彼らの列に加わった。

「おっと、危ない危ない」

スパルタカスのはつとした。そういえば、肝心のクラীগゲをまだ呼び戻していないではないか。

「すみません、誰かクラীগゲさんと呼んできて——」

「あ、アタシが行くつす！」

ヨロイは重厚な漆黒の鎧をもともせず、世界最速の男——ボ〇トを超える速度で広場を駆けて行く。

「あ、ヨロイさんは遠慮し——」

スパルタカスの手が虚しく空を掴む。

クラীগゲの不機嫌の原因はそもそもヨロイだ。その彼女を連れ戻し役にするのは御免被りたいのだが……。行ってしまったものはいしやうがないが、あと一人くらい行かせるべきだろう。スパルタカスは、ワイさん、と声をかけ、彼に二人を連れ戻してくるよう頼んだ。

クラージェはガゼフが騎馬で去っていった方角に居たためか、ヨロイは彼女をすぐに見つけることができた。遠くの平原を眺める彼女は凛々しく、スパルタカスのいう役割を果たせそうな雰囲気を感じていた。言い得ぬ魔性・妖艶さに、見る人皆が話しかけ辛いと感じることだろう。しかしヨロイはそういったものを気にするような人間ではないので、クラージェさん、とすぐに声をかけるのだった。

「……なんですか」

ヨロイに背を向けたまま放たれたクラージェの色の色は、明らかに不機嫌そのものだった。賢者タイムを迎えた彼女は今、どうしても一人になりたかった。故にヨロイは邪魔者なのだ。

「スパルタカスさんが呼んでるっすよ」

「……ふうん」

「すごく大事な話なんすよ」

「……ふうん、あっそう」

関心の感じられないクラージェの生返事に、ヨロイはむっとした。だが、クラージェはそんな彼女のことなど知ったことかと言わんばかりで、仕舞には遠眼鏡を取り出して地平線を眺め始める始末だ。

そのことが頭にきたヨロイは、ずかずかとクラージェに近づいて行く。と、その時だった。

「まずいつ」

遠くの平原で、ガゼフが敵陣を突破することなく、落馬して孤立しているのが見えた。

『クラージェ殿、我々はスパルタカス殿らと敵を挟撃する。しばし、貴殿の忠臣たちの力を貸していただきたい。そしてわがままついでに一つだけ、頼みたいことがあるのだが……』

この場所でガゼフに言われたことは一つ。ガゼフ達が敵陣の一面を突破して抜けた場合、スパルタカスらに挟撃を開始するように伝えてほしい、というものだった。

作戦は失敗に近い状態だ。外側の攻撃の要、肝心のガゼフが敵陣内に取り残されてしまっている。そして彼を囲うように、複数の天使が

出現する。

リンチの恐ろしさを痛いほど理解しているクラージェは、ヨロイにスパルタカスと呼ぶように言い付け、彼女自身は愛刀“古い混沌の刃”を携え、平原を駆けていった。

「あーっ！ 待ってー！」

ヨロイはクラージェの言い付けを、言われたすぐそばから破った。

「ヨロイ殿、待たれよー！」

ワイはやつとの思いでヨロイに追いついた。追いついたのだが、こちらの声が聞こえていないのか、走り去っていく駄犬な彼女。

「……………」

ワイはヨロイの漆黒の背を、白い目で見送るのだった。



包囲の突破に失敗したガゼフは、絶体絶命の窮地に立たされていた。

「くっ、まさか陣形を狭め、壁を厚くしているとはな……………」

こちらの作戦を看破し、的確に防いだ敵指揮官を忌々しく思う。

「武技、流水加速！」

天使の攻撃を剣の腹で受け流し、返す刃で天使を斬り飛ばす。消滅した天使を一瞥し、ガゼフは唇を噛んだ。これで15体目。だが、倒しても倒しても湧いてくる天使たち。しかもその天使たちは、武技を使わねば倒せないほどに堅い敵ときた。こちらの身を案じ、戻ってきたくれた自慢の部下たちも、貧弱な装備のせいで苦戦を強いられている。一人が肩口を貫かれて倒れ、一人が脇を切り裂かれ倒れ伏す。

元々不利だった状況がさらに不利になっていく。

（スパルタカス殿の合流を待って、守りを固めるか？ いや、我々の装備で守勢に転じるのは自殺行為か…………。ならば、一か八かで特攻を仕掛けるしかあるまい！）

ガゼフは決死の特攻を敢行すべく、大きく息を吸って呼吸を整える。ガゼフは脇を締め、足に力を込める。彼の標的は、隊長であるニグンに絞られた。

「ふうん……。各員、天使を失ったものは再召喚をし、ストロノーフに攻撃魔法を集中させろ」

対して、ガゼフの視線を察したニグンは隊員に天使を再召喚させ、それぞれが攻撃魔法を放つように命令を放った。

強い衝撃がガゼフを襲う。彼の貧弱な防具では、それらのダメージ軽減は期待できない。事実、ガゼフは身体をよろめかせ、口から血を溢した。

「がはっ！」

ガゼフの防具はひび割れ、欠け、その性能を低下させていく。

「今だ、天使で止めを刺せ！」

部下に囁き声を仕掛けた魔法詠唱者マジックキャスターの存在を警戒したニグンは、かさず指示を出し、隊員に天使をけしかさせた。敵はガゼフだけではないのだ。彼を討ち取った後、十中八九、その者と戦うことになるだろう。

眼前に迫る天使。ガゼフはその一連の動作がスローモーションのように見えた。

天使は掲げた光の剣をガゼフへと振り下ろす。陽光聖典の誰もが、この時、作戦の成功を確信した。

『なっ!!』

陽光聖典の隊員たちが驚愕の声を上げた。隊員の天使に一筋の切れ目が入り、天使の上半身がずれた。重力に引かれるままにそれが地に落ちると、天使は消滅した。

「クラーゲ殿……」

刀を振り抜いた姿勢のクラーゲが、ガゼフの眼前に映る。

ガゼフはクラーゲの圧倒的な戦力に目をむいた。彼女の持つ長刀は禍々しく、身につけている装備品、その全てが国宝級以上の物品だとわかる。

「ガゼフさん、貴方に効果があるかはわかりませんが、これを渡してお



きます」

差し出すクラীগの左手には、光り輝く石があった。

「クラীগ殿、これは？」

ガゼフはそれを受け取ると、首を傾げた。

「雫石と呼ばれる、手で碎けば使用者のエイチピー……生命力みたいなものを回復させる品です」

「なんと！ かたじけない」

説明を聞いたガゼフは迷わずに、雫石を持った手をぐつと強く握った。石と言われた通り、雫石は硬いものだったが、握った途端に砕けた。

「何やら、体中の痛みが引いてきたようだ」

ガゼフは神妙な面持ちで、クラীগを見た。

雫石は、ガゼフのような異世界の人間にも効果があるらしい。後で皆に教えておこう。

クラীগはガゼフが回復したのを確認すると、敵隊長であるニグンを睨みつけた。彼女からの背筋も凍るような視線に、ニグンは心臓が止まったかのような錯覚に陥った。

ごくりと喉が鳴る。

「な、何者なのだ、貴様は……？」

自分の雄姿に怖気づいた敵。そう認識したクラীগは、調子に乗った。

「我は王。呪われた火の王だ」

「呪われた火の王……だと？」

王という言葉と呪われた火という言葉に、ニグンは戦慄を覚えた。クラীগの付けている白銀の冠は、王冠というよりもティアラの方に近い形状だった。しかし、彼女が王か女王かなどという小さな観点はどうでもよい。問題は、遠目でもわかるぐらいそのティアラが膨大な魔力を内包しているものであり、彼女の左手に迸る灼熱の炎の存在が彼女を魔法詠唱者と関連付けていた。

「奴が例の魔法詠唱者か？」

ニグンが例の魔法詠唱者の目撃者である部下に問う。しかし、彼は

首を横に振った。

(なんだとっ? ならば、少なくとも魔法詠唱者が二人もいるということか……)

ニグンは有利な状況が押し返されてきたことに歯噛みした。

「ああー! やつと追いついたっ!」

戦場に不釣り合いな少女のような女の声。

重厚な漆黒の鎧などもしない猛スピードで走ってきたヨロイ。その姿は部下からの報告と合致している。

焦燥感に駆られ始めたニグンは泡を食った様子で、

「おい、まさかあの者か!」

「ま、間違いありません、隊長!」

部下からの報告では、あの漆黒の騎士は魔法詠唱者ということらしいが、先ほどの身のこなしからして、魔法詠唱者としての一面はおまけ程度なのだろう。それに、明らかにあの二人の女は、ガゼフよりも数段強い。そう確信したニグンは、部下に全天使をもってガゼフら三人を殺すように指示を飛ばした。

「ふん、向かってきたか……愚かな」

最早、〃呪われた火の王〃になりきってしまったというクラージェは絶好調だった。彼女は懐から〃炭松脂〃を取り出すと、それを〃古い混沌の刃〃の刀身へと滑らせるように塗っていく。

「万象一切灰燼と為せ、流刃惹火」

クラージェ渾身のオサレ魂が火を噴いた。

燃える刀に接触しただけで、天使が焼き尽くされ消滅する。

目の前で起きている光景に、隊員は夢でも見ているのかと思った。いや、思いたかった。

陽光聖典ご自慢の天使たちは、剣を交えることすらできず、灼熱の業火の前に消え去っていく。演武を行っているかのような流麗な動きで、クラーゲは天使たちを次々に葬る。本来、彼女の中身にこのような芸当は不可能だ。しかし、ゲーム内でのこのキャラクターに積み重ねられた経験が、歴戦の勇士たるガゼフをして啞然とさせる動きを可能とさせていた。

「ふっ……。弱い、弱すぎるー！」

スパルタカスたちが合流するまでもなく、僅か2分足らずの戦いで20を超える天使が全滅した。

クラーゲは刀を一振りして剣先を下げると、左手を腰に当て、片足を前に踏み出し、顎を上げ、目線を僅かに下げ、お気に入りの決めポーズ。そして……満面のドヤ顔をニグンに向けて放った。

「ば、馬鹿な……全滅……だど？」

しかしながら、ニグンにはドヤ顔に構っていられるほどの余裕はなかった。起きてはならない、信じられない光景を受け止めるだけで精一杯だった。

「くっ、こんな、こんなことがありえるかあっ!!」

敵のあまりの強さから来る恐怖に、なりふり構っていられなくなつたニグンは、

「プリンシパリテイ・オブザベイシヨン監視の権天使！ やれっ！」

と、自身の召喚した天使に、切羽詰まった様子で命令を下した。ニグンの命令により、プリンシパリテイ・オブザベイシヨン監視の権天使はメイスを出現させると、ドヤっているクラーゲへと接近した。

「おっ……」

自身が影に覆われるほどの、敵天使の大きさに、クラーゲは目を丸くして見上げた。

プリンシパリティ・オブザベイシヨン  
監視の権 天使は隙をさらしたクラーゲに向けて、手に持った凶器を振り下ろした。

瞬間——、金属同士がぶつかり合う、かん高い音が響き渡った。同時に、その衝撃の余波で砂煙が舞う。

その場にいた者たちが皆、クラーゲと監視の権 天使の居る場所を注視した。煙が晴れると、いつの間にか漆黒の騎士がその間に割り込んでいた。その左手には巨大な鉄板のような形状をした黒い特大剣が握られており、彼女はそれを盾のようにして、監視の権 天使のメイスを防いでいた。

「ていつー！」

ヨロイは手首をひねって特大剣を回転させ、監視の権 天使のメイスを弾いた。そして特大剣を地に走らせると、下から掬い上げるような斬撃を放った。

「！」

ニグンは絶句した。監視の権 天使のメイスが、斬撃を受けた個所を起点に、真つ二つに折れたのだ。

クラーゲはヨロイの攻撃の威力の高さに、ほお、という感心の声を漏らすと、

「ふっ……。さすがは第一の騎士」

と、言つて誇らしげに頷く。

「え？ プ、プ、プリ……なんて？」

クラーゲの台詞がうまく聞き取れなかったヨロイが訊き返すが、クラーゲはニグンに対してのドヤ顔に夢中らしく、残念なことに無視されてしまった。

ガゼフにとって第一の騎士という言葉は聞き慣れぬものだったが、クラーゲの面持ちとヨロイの献身的な姿勢に、ヨロイが一番クラーゲに近い騎士なのだろうと当たりを付けた。

「まあ、いいや。そういうえばさっきのおもしろかったなあ……」  
無視されたことは既に頭の中から消えた。

ヨロイはクラーゲの持つ業火を纏った長刀を見ると、つい真似したくなってきた。彼女は「炭松脂」を取り出すと、先ほどのクラーゲ同

様にそれを刀身に滑らせ、

「万象一切灰燼と為せ！ 流刃惹火あ！」

「パクんなし！」

灼熱の業火を纏った長刀を見つめながら、いや、そつちもパクリじやん……。などとヨロイはクラীগに心の中でツツコミを入れた。

黒い煙を上げながら燃え盛る特大剣に、陽光聖典の面々は絶望した。どう見ても、あの特大剣はクラীগの長刀よりも危険な代物だ。

(あれは触れるどころか、近づいただけで炭にされるな……)

刀身の周囲が歪むほどの炎の熱に、ガゼフは顔を顰めた。

「さてと……」

とんとん、とヨロイはつま先で地面を軽く叩くと、一気に最大速度まで加速する。彼女は監視ブリリンシバリテイ・オラザベインヨンの権天使を走り抜けざまに、特大剣で薙ぎ払った。

攻撃を受けた監視ブリリンシバリテイ・オラザベインヨンの権天使は無残にも、炭となって消滅した。

「くっ！」

分かっではいたことだった。自慢の天使がああ黒騎士に歯が立たないということは。だが、力の差をこうも見せつけられると、悔しさが滲む。ニグンは唇を噛みしめた。

「二、ニグン隊長っ！」

隣にいる部下が焦燥に駆り立てられ、情けない声を上げる。彼の視線の先には、こちらへと一直線に向かってくる、10を超える歴戦の猛者たちの姿が映っていた。



「援軍だ！」

「スパルタカス殿らが来たぞー！」

敗北手前からの一転した攻勢、援軍登場による戦力の逆転に、ガゼフの部下たちは歓喜の雄叫びを上げる。

ガゼフも、ついに来たか、と口元に笑みを作った。

「ガゼフ殿！ 無事ですか!？」

プレイヤーたちを率いてきたスパルタカスが、ガゼフのボロボロとなった防具を見て訊いた。

「私は平気だ。クラーゲ殿から雫石なる一品をいただいたのでな」

「へえー。それ、不死者以外にも効果あるんだ」

「何か？」

「いえいえ、独り言です」

スパルタカスは良いことを聞いた、と思うと同時に、彼はガゼフらに恩を売る機会を得たことを機敏に察知した。

「皆！ 傷ついた兵たちに雫石を分けてやってくれ！」

スパルタカスの意図に気づいたのか気づいていないのかはわからぬが、プレイヤーたちはそれぞれ雫石を兵士たちに分け与えていく。

「ヌフフフ。さあ、受け取りたまへ」

そう言ってシコシコは兵士へと、股間を覆う布から取り出した雫石を差し出す。

兵士は顔を引き攣らせると、

「か、かたじけない……」

と心底嫌そうな顔をして、それを受け取った。

血の気の引いていた、弱っていた兵士たちに血の気が戻っていく。

その光景を前に、ニグンは『敗北』の二文字を意識してしまった。

「ニグン隊長！ 敵兵が！」

「わかっている！」

仕舞には部下が騒ぎ出す始末。

(くそっ！ だが、まだこちらは切り札を切ってはいない！)

ニグンは懐にある魔封じの水晶へ手を伸ばした。それを掲げると、夕暮れの光を反射し、美しく煌めいた。

「最高位天使を召喚する！」

ニグンの宣言に隊員たちから喜色ばんだ声上がる。

「何、あれ？」

クラーゲはニグンの持つ魔封じの水晶に興味を示した。彼女は遠

眼鏡を取り出し、それを覗き込んだ。

彼女に倣い、他のプレイヤーたちも兜を取って遠眼鏡を覗く。綺麗な水色をした水晶に、プレイヤーたちはその視線を釘づけにされた。光り輝く魔封じの水晶だが、次第にその輝きを強くしていく。そして――

「出ですよ！ ドミニオン・オーソリテイ 威光の主天使！」

今までの天使とは比べ物にならない強さの天使が降臨した。陽光聖典側からは『おおおお!!』という歓声上がり、王国戦士側からはどよめきが巻き起こった。

一方のプレイヤー側はというと、プレイヤーの一人が、

「おいっ！ こいつボスだぜ！」

と、声を張った。

プレイヤーたちの目には、ドミニオン・オーソリテイ 威光の主天使に『法国の秘蔵』という二つ名がついて見えている。さらには、HPのゲージバーすら見える。

「ヒヤッハー!! ソウルはいただきだー！」

ボスは倒せば通常の敵よりも多くのソウルをドロップする。倒してソウルを得ようと、セイサイがクラブを片手に突撃していく。

「な、なんなのだっ、こいつらはー！」

ニグンは召喚した最高位天使に対して一切の怯えを見せない、むしろ眼光を鋭くしたプレイヤーたちに当惑した。

しかしドミニオン・オーソリテイ 威光の主天使は人では決して到達できない第七位階魔法を使用できる、人の上位にある存在だ。負けるはずがない。

「ドミニオン・オーソリテイ 威光の主天使よ！ ホーリー・スマイト 聖なる極撃を放てー！」

ニグンの命令を受け、ドミニオン・オーソリテイ 威光の主天使は極大の光をセイサイに向けて放った。その攻撃範囲の広さに、セイサイはローリングでは避けきれず直撃してしまう。

「オオウツ!!」

野太い悲声を上げ、セイサイは吹き飛ばされた。

「ふ、ふん……驚かせおって」

冷や汗をかいたが、相手はドミニオン・オーソリテイ 威光の主天使の一撃によって沈んだ。ニグンは不安から解放された反動か、にやりと笑みを浮かべた。

しかし、それは僅かの間だけだった。

吹き飛ばされたセイサイが、

「くそがよお〜」

と言いながら立ち上がった。アクション中に攻撃を受けたためか、彼の受けたダメージは深刻なものだった。

セイサイは膝が笑って立ち上がれなく、その場にへたり込んだ。

「生きている……だど？」

普通ならありえない光景に、ニグンの心は『敗北』を受け入れた。

ニグンは指揮官としては、類稀なる才を持っている。ここはドミニオン・オーソリテイ威光の主天使を盾にして撤退すべきだ。人を超える身体能力を持った化け物集団が王国にいる。何としても、この情報を持ち帰るべきだ。彼の理性がそう告げていた。

「各員傾聴！ 天使を再召喚できる者は再召喚し、それを盾にしろ！」

これより撤退を開始する！」

ニグンからの思いもしない命令に、隊員たちは驚愕し、困惑した。しかし、陽光聖典は統率の取れた部隊だ。思考が停止したのは一瞬だけ。彼らは天使を再召喚すると、移動用の馬が繋がれている森へと撤退を開始した。

「待て！」

「逃がさねーぜ！」

「追いかけるー！」

いち早く彼らの撤退に気づいた援軍組、スパルタカスらが駆けるが、その前にドミニオン・オーソリテイ威光の主天使と数体の炎の上位天使が立ちはだかった。アークエンジェル・フレイム炎の上位天使は容易に倒せたが、スパルタカスの強さではドミニオン・オーソリテイ威光の主天使に攻撃をしても、少しのダメージしか与えられなかった。

ニグンと陽光聖典の隊員たちは背後を確認することもなく、必死に走った。取り損ねた獲物であるガゼフらに背を向けて走った。

遠ざかっていく陽光聖典に、スパルタカスは大きな舌打ちした。

忌々しくドミニオン・オーソリテイ威光の主天使を見据えると、突如、雷撃が奔ってそれを貫いた。ドミニオン・オーソリテイ威光の主天使のHPがおおよそ半分強も削れる。スパルタカ



スが背後を振り返ると、雷の槍を構えたワイがいた。

「私が倒してしまっても構わんか？」

「構いません」

スバルタカスの了承を得たワイは、二本目の雷の槍を投げ放った。  
ドミニオン・オーソリテイ  
威光の主天使は高速で飛来する雷の槍を避けることができず、その身を消滅させた。

『VICTORY ACHIEVED』

プレイヤー全員の頭の中にポップアップが表示された。そして、3000ソウルと威光ドミニオン・オーソリテイの主天使のソウルをワイが取得した。

「……まるでゲームの中にいるみたいだな」

ワイは手の中におさまった、白く輝くソウルを見て呟いた。



「何故あの時、敵部隊を追いかけなかったんですか！」

村の広場中央。

華々しい逆転勝利を飾った余韻に浸るガゼフと兵士たち。そんな彼らを尻目に、スバルタカスは声を荒げた。彼が怒っているのは、陽光聖典追撃にクラージェとヨロイが参加しなかったことであつた。実際、クラージェとヨロイならば、ドミニオン・オーソリテイ威光の主天使を1〜2撃で葬れるだけの力があつただろう。ドミニオン・オーソリテイ威光の主天使に邪魔されたせいで陽光聖典を取り逃がしてしまつた。それさえなければ完璧な事運びだつた。彼の怒りは、思うように駒が動かなかったことであつた。

「天使のでかさと、攻撃のインパクトにビビつたから」

「アタシはワイさんにソウルを譲るためつす」

クラージェとヨロイの言い訳に、スバルタカスは青筋を浮かべた。

「ヨロイさんはともかく……、クラージェさんは情けないこと言わないで下さいよ」

絶賛賢者タイムを迎えているクラージェは、民家の壁に背を擡げ、体

育座りをして小さくなっている。

「ま、まあまあ。スパルタカス殿、もちつけもちつけですぞ」

シコシコが宥めるように言うが、もちつけなどというネットスラングは、煽りにしか聞こえなかった。スパルタカスは額の皺をさらに深くするが、シコシコに対しては特に言及しなかった。ああ見えて、シコシコはクラーゲよりも強いプレイヤーだ。しかも裸一貫・素手装備で、である。怒らせて攻撃でもされたら、ワンパンであの世送りだ。「それにクラーゲたんは女王なのですぞ。女王に対してそのように凄んでは、ガゼフ殿に怪しまれますぞ」

「クラーゲたん言うなし」

俯かせていた顔をぼっと上げて、クラーゲがツツコミを入れた。

戦が終わった後、クラーゲはシコシコに猛烈に激しく請われて、渋々ながら王になることを了承した。しかし、統率力に自信のない彼女は、しくったかな、ともう後悔し始めていた。

「ねえねえマリーたん、マリーたん。マリーたんの地位は何になるでござるか?」

シコシコが今度は、ヨロイに顔を向けて言った。

マリー? 彼女はヨロイさんだろう。クラーゲは首を傾げた。

「そういえば、シコシコさんはヨロイさんのことをいつもマリーって言ってますけど、マリーというのはもしかして別キャラの名前とかですか?」

済んだことをぐちぐち言うのはもういいだろう、と切り換えたスパルタカスが訊いた。

「いんや、違いますぞ」

意外な事に、彼は首を振った。

「では、何ですか?」

「彼女の顔を見て気付きませぬか?」

「顔?」

言われるがままヨロイの顔をじーっと見るが、美少女ということを除いて、心当たりがなかった。

「わかりません」

「ああ、残念。とあるゲームのキャラと瓜二つなのだが、きつと言つてもわからないんジャマイカ」

「ゲームですか？ ちなみに、そのゲームの名前は？」

「Dデッド・オア・アライフOアライフA」

マツチらがカルネ村へ到着したのは、すでに日が沈んでからだった。彼は遅れた原因であるぐうたらなプレイヤーたちを恨めしく思った。

運が良いことに、篝火の周りにはプレイヤーたちがまだ屯していた。彼はその中にスパルタカスがいることに気づいた。

「スパルタカスさん、呼んできました！」

「ああ、マツチさん。ご苦労様です」

「いえ……」

「何やら人数が少ないようですが」

スパルタカスがマツチと来たプレイヤーたちを見回すが、あの丘にいた百余名よりも遥かに少ない。その数、十人余りといった具合だ。

「スパルタカスさんたちがここへ来ている間に、皆好きなように動いていったらしいですよ」

「そうですか……」

そっけなく言う。

スパルタカスにとって、自分についてくる気のない連中などどうでもよかった。

「あの、スパルタカスさん。その……皆が散り散りになった理由なんですか……」

マツチはおずおずとスパルタカスに、プレイヤーらの行動理由を説明した。

最初に一国を落とした奴が最強——そんな病気全開な、意味不明なもののために散らばるなど馬鹿すぎる。普通は連絡手段を構築してからすべきだろうに……。スパルタカスは頭痛のする頭を軽く振って、ため息をついた。

「ん……？「国？」」

スパルタカスは、馬鹿共プレイヤーたちがこれから起こそうとしていることに、さらに頭痛がひどくなるのを感じた。十中八九、奴らはこの世界がゲームの世界とかだと思って、頭空っぽにして行動してるんだろう。

「これって、落とす対象に王国ももちろん入ってるんだよね……」

さすがにすぐに行動を起こす、もしくは実行するような馬鹿はいないだろうが、いると思っただけで行動した方が良さそう。そう思ったスパルタカスは、マツチに休むように伝えると、ガゼフの元へと向かった。

「ガゼフ殿、少しよろしいでしょうか？」

村の一面にある倉庫、そこで捕虜となっているベリユースの尋問を終えたガゼフが、如何された、と返事を返す。

「我々、ドラングレイグ王国及び、騎士団が滅びを迎えた理由についてなのですが」

スパルタカスの真剣な表情に、ガゼフは都合よく色々察した。

ガゼフは部下にベリユースを連行するように指示を飛ばし、二人だけの間を作った。

「スパルタカス殿、そのような重大な事を話してもよろしいのか？」

「王からの指示です」

大嘘である。クラーゲはそんな指示などは出していない。

「そうであったか。……それで、貴殿の国が滅びを迎えてしまった理由とは？」

「……強大な敵による侵攻です。我らはそれを押し返すことが出来ず、この国へと落ち延びてきました」

「なんと！ 貴殿らほどの者たちですらかなわなない敵が!？」

「はい。その者たちは、たぶん、死ぬことのない中二病蛮族、もとい不死者です」

そう、たぶんだ。この世界ではまだ自分は死んで復活したことがない。故にプレイヤーが不死者であるという保証がない。

スパルタカスは、自分についてこなかった彼らを実験台にしようと考えていた。

「不死者？」

聞いたことのない単語に、ガゼフは疑問符を浮かべる。

「それに、死ぬことのないとは？」

「検証している段階で敗走してしまったため、決してとは言いきれませんが、言葉そのままの意味です。心臓を貫こうが、頭を砕こうが、毒を盛ろうが、崖から突き落とそうが……殺しても殺しても、ゾンビと成って復活してくる訳のわからないことを言う人間モドキです」

「まさか……そのような存在が……？」

にわかには信じがたい話に、ガゼフは唾然とした。

「この話をした理由。ガゼフ殿ならもうお気づきだとは思いますが……」

「その者たちの次なる標的が、リ・エステイーズ王国、と？」

「はい。王がそう申しておりました」



村の広場に集まる者たちから見て、クラージェの機嫌は最悪といつてもいい足りないくらいだった。その理由は、以下のとおりである。

D T歴Ⅱ人生の彼女がヨロイと二人きりの部屋で夜を明かす羽目になったのは、他でもない、スパルタカスのせいだ。

村長から借りた空き家で雑魚寝するプレイヤーたち、彼らの横で同じように寝ようと思った時、

『クラージェさんは王とはいえ女性ですし、同じ女性であるヨロイさんと一緒に、隣の空き家で寝てください』

などと言われて追い出されたのだ。

空き家の中へ入り、二階へ行くと、部屋のベッドの上ではレイムシリーズを脱ぎ去ったヨロイが横になっていた。その彼女を見て、クラージェは、

(あ、やっぱりこいつもMOD使ってやがる)

などと冷静に洞察した……だが、艶のある色白の肌に輝く金髪、整ったシミ一つない美少女顔、そして黒い水玉模様の入った白い下

着。それらを見た瞬間、クラীগの頭の中はスパークした。

(よし、俺も脱いで寝るか！)

白王シリーズをパージし、即座にベッドイン。寝ているヨロイとの距離をじりじりと詰める。そして、鼻息がかかりそうなほどに接近した時……、

あ、やばい、興奮しちゃった。などと思う。そして――

(……ああああああく!!)

自分に大事なものが付いていないことに、いまさら思い当る。それで即座に賢者タイムへ。あまりのショックに、結局、ウトウトし始めたのは夜明け前。日の出とともにヨロイに起こされた彼女は、目の下にクマを作り、一目見てわかるほどに疲労困憊だった。

「クラীগ殿。貴殿の悲痛な境遇、私のできうる限りのことで、手助けできればと思う所存のだが」

沈痛な面持ちで目を伏せるガゼフ。

なぜ彼がああいう表情をしているのか、甚だ疑問だ。そう思い、ワイに聞いてみたところ、

「クラীগ殿は不死者との戦争で、父君と母君を目の前で惨殺され、その仇たちに輪姦されそうになった経緯があり、命を奪われていく民と両親、強姦されそうになった時の辛い経験を夜な夜な悪夢として思い起こしてしまっている……。という設定らしくてな。それで、クラীগ殿を救った英雄がスパルタカス殿。という設定らしい」

(く、クズすぎるっ！ 親の顔が見てみたいわ！)

スパルタカスの設定したクラীগの悲劇に、彼女はドン引きした。しかも、ちゃっかりスパルタカス自身は美味しい所を持っていつているところが、さらに下衆さに拍車をかけている。

おそらく、目の下にクマを作っているクラীগを見て、即席の嘘話をガゼフに語ったのだろう。

よくもまあ、そんなに騙りをホイホイと作り上げられるな。と、クラীগはある意味感心した。

「約束だ、クラーゲ殿。王国内での貴殿の保証は、私が責任を持ってしよう。また、陛下への謁見の際、貴女の境遇を包みはがさず話すことになるが……よろしいか？」

真摯に訊いてくるガゼフ。そんな彼に、クラーゲは非常に申し訳ない気持ちになってきた。

なってきたのだが、こうなっては嘘を通すしかない。

「はい……。お願いします」

ああ、これでこっちもれつきとした加害者か。そう思ったクラーゲは、心の中で泣いた。主に自分自身の情けなさど罪悪感に。

一方、クラーゲの蚊の鳴くような声、その傻げさに、ガゼフはその勘違いを深くしていくのだった。



陽光聖典は任務に失敗し、敗走。秘蔵の魔封じの水晶も失い、召喚した主天使すらも倒された。

スレイン法国の神官たち及び他聖典のメンツに衝撃が走った。土の神官長から齎されたこの情報は、法国を脅かす危険な存在を報せている。

魔封じの水晶を失ったのは手痛い損害だが、ニグン及び陽光聖典はまだ存命している可能性がある。

漆黑聖典に新たな任務が下された。内容は、陽光聖典の救出。漆黑聖典隊長は、すぐさま聖典のメンバーを集めると、リ・エステイーゼ王国へと向けて旅立った。

法国を発ってから数日。法国と王国との国境、その近辺の森で、彼らは遭遇した。

「ターゲット向けられるってことは……、敵つてことだよなあ！」

鈍重そうな甲冑を着た男が、隊長へと槍を向けた。



ダークソウルの世界では、敵以外のNPCには基本ロックはかけられない。敵対時や敵に対してロックがかかるのだ。

隊長には、男の持つ槍が唯一無二の一品だと感じられた。込められている魔力は膨大で、帯電しているのか、所々でスパークを放っている。

「オーンスタイン。とつとと倒しちまおうぜ」

漆黒聖典に立ちほだかるようにして立つ男がもう一人。その男は全身を銀色の鎧で固めており、左手にはくすんだ色の大剣が握られていた。

「つーか、こいつまたいんのかよっ。ぷっ……はははははは！ ……ああ、腹いて」

セドランを指差し、オーンスタインと呼ばれた男が嘲笑した。

「出たよ、ドヤ顔ダブルシールド。ルートの他にもいんのか」

隊員を貶され、隊長はむっとする。当のセドランも、険しい表情で男二人を睨んでいる。

しかし、漆黒聖典の任務は彼らのような、ならず者の相手をするこ  
とではない。一刻も早く陽光聖典を見つけ出し、救出しなくては  
……。

「申し訳ないが、そこを通してはもらえないだろうか？」

隊長がいうと、二人の騎士は顔を見合わせた。

「こいつマルドロじゃね？」

「背中向けたらぜってーバクスタとってくるわ」

槍を持った騎士が懐から黒い壺を取り出した。彼はそれを振りかぶると、隊長に向かって投げつけた。

着弾した途端、それは爆発し、隊長は炎に包まれた。

「くっ……」

いきなり先制を許してしまった。

隊長は地を転がって火を消化する。

下を向いた顔をすぐさま上げると、眼前に雷撃が迫っていた。

間一髪だった。隊長は顔を横に傾ける事でそれをかわすことに成功した。しかし、続けざまに矛先が彼の顔を貫かんと迫る。

隊長は槍を引き戻し、上に振り上げてその一撃を逸らす。

「ちっ、こいつうぜえ！」

自慢の二連撃を防がれ、『†Ornst ein†』——オーンスタインは声を張り上げた。

オーンスタインが吠えている隙に、隊長は体勢を整える。そして、今度はお返しとばかりにオーンスタインへ向かって槍を突き出す。

槍と槍がぶつかり合い、周囲に雷撃が走った。

『†Artorius†』ことアルトリウスは左手に持つ大剣で、中性的な顔をしたレイピア使いを弾き飛ばすと、青と銀色をした大剣を持った男と鏢迫り合いとなった。

腕に力を込め、そのままの態勢で男を突き飛ばし、距離をあける。「へっ、てめえぶ」ときが俺に盾つくなよ」

先の鏢迫り合いで、アルトリウスは大剣を持った男が自身よりも弱いことを悟った。彼は大剣を肩に乗せ、余裕の笑みを浮かべる。

「……むかつく男だ」

男が言う。

彼は再び大剣を構えると、アルトリウスを見据えた。

その態度が余裕のないものに見えたためか、アルトリウスは兜の奥で笑みを深めた。

「雑魚なんだから、雑魚らしくとっととやられてろよ」

「……」

アルトリウスの言葉に男は青筋を浮かべた。英雄級以上の兵が集まる漆黒聖典、その第六席次たる自分を指して、雑魚呼ばわりとは……。

しかしながら、実際のところ、両者間に実力差があるのは明らかだった。

アルトリウスの回転しながら打ちつけてくる連撃に、男は徐々に追い詰められていく。

掬い上げるような一撃が、男の大剣を上弾く。隙だらけとなった懐。そこに向けて渾身のダッシュ突きが放たれる。

だが、手応えは壁にぶつかったかのような味気ないもの。

アルトリウスと男の間には、漆黒聖典第八席次——セドランが。彼は左手に持つ大盾で、アルトリウスの強烈な突きを防いでいた。

セドランは大盾を押し返し、アルトリウスを後ろへと退かせる。そしてその隙を狙っていたのか、第四席次の神聖魔法がアルトリウスへと放たれる。そして、アルトリウスは光に包まれ、発生した衝撃で吹き飛ばす。

深刻ではないが、直撃による少なくないダメージが、アルトリウスへと与えられる。

「っ……あああああ〜!! 糞どもがよおおお!!」

ゲーム脳で、この上なく短気なアルトリウスは、自分が無双できないことに癩癩を起した。

「俺は†Artorius†だぞ! てめえらみてーな雑魚が生意気なことしてくんじゃねえよ!!」

そう喚いてから、荒い呼吸を整える。

「ひっひひひ。いいぜ、てめえらム力つくから、この俺の最強究極奥義をくらわせてやる」

アルトリウスは無手だった右手にもう一本の『栄華の大剣』を手にする。

そして——

「おおおおおっ! インフイニット・スラッシュ無限の斬撃!!」

さながらオタ芸である。目にも止まらぬ機敏な動きで、剣を無茶苦茶に振り回す。

キレた子供のように、連続猫パンチの様なカツコ悪さだが、彼の身体は第六席次を軽く捻ることが出来るほどのもの。振り回される大剣からは、次々に衝撃波が発生し、漆黒聖典の接近を許さない。

「くっ! どうする、セドラン?」

第六席次が表情を苦くして訊く。

「どうするも、止めるしかあるまい……」

両手に持った盾を握りしめ、セドランは荒らぶるアルトリウスを見据えた。

セドランはすうーつと大きく息を吸う。一拍して、姿勢を低くし、タツクルを仕掛けると同時に盾を突き出す。

「な、なにいいい!?!」

馬鹿な！ 俺の究極奥義が止められるだどっ!? などと思つてアルトリウスは顔を衝撃に歪める。

アルトリウスの両大剣のうち、右手の剣は後方へすっ飛び、左手の剣はセドランの右肩口から左胸までを切り裂いている。セドランは重傷を負ったが、アルトリウスの迷惑なオタ芸は止まった。

「ナイスだぜ、セドラン」

倒れ行く仲間の隣。一気にアルトリウスへと接近した第六席次は、大剣を横に薙ぎ払った。

アルトリウスの首が宙を舞う。

そして、首と分離した胴体は、初めからそこに存在していなかったかのように、霞となって消え失せた。

「はあ、はあ、はあ……」

心臓に突き刺した槍を引き抜く。

膝について前のめりに倒れて行く、雷の槍を持った騎士。

灰となつて消滅した騎士を一瞥し、隊長は頭から流れる血を拭いた。

「一体、何だったんだ……あの騎士は……? そうだつ、もう一体!」

隊長は一瞬だけ呆けていたが、かぶりを振ると、隊員たちのいる方へと振り返った。

見えたのは、仰向けに倒れているセドランと、彼を神聖魔法で治療している第四席次。そして脇腹を押さえる第二席次に、片膝をつく第六席次。

これは少し厳しい任務になりそうだ。隊長は大きなため息をついた。

自分は頸を刎ねられて死んだ。そういう感触と感覚が今でも残っている。

目を覚ましたアルトリウスは、突然襲ってきた吐き気に、口元を押さえた。

「う……っ、ここは……？」

空は、故郷では見られないほどの透き通った夜空で、辺りは暗く良く見えない。彼はたいまつを点けて、辺りを照らすことにした。

光を頼りに辺りを探ると、今いる場所は小高い丘だった。先日、プレイヤーの皆が召喚された、あの丘だ。

「なーんだ。やっぱりここゲームの世界じゃねえかよ」

死ねば現実に戻るのかも、なんてちよつと期待していたのが馬鹿みたいだ。

そう思つて、アルトリウスは座りこむと、途方に暮れたように、ぼうつと星を眺めた。

「アルトリウス。お前もここに？」

突然声が掛けられた。振り返ると、そこにはオーンスタインがいた。

ああ、こいつもやられちゃったのか。

アルトリウスは馬鹿にしたい気持ちに駆られたが、自分も同じやられた側なので、やめておいた。

「つくしよく！ あのロン毛野郎、次あつたらぶつ殺してやる！」

物騒な台詞を吐きながら、アルトリウスの隣にどかっと座る。それを横目で見ながら、負けた時のことを思い出す。

目にも止まらぬ斬撃の嵐、全てを受け流す美しい剣捌き、それを可能とした最強究極奥義、無限インフィニット・スラッシュの斬撃。あれは完璧な、誇りある究極の技だ。あれが負けるなんて、まぐれに決まっている。

そう考えると、御しがたい怒りが湧いてきた。

「オーンスタイン、もっかいあいつらと戦おうぞ」

「おけおけ」

「でも、まあ、あれだ。今日は疲れたから休もうぜ」

「おう、俺も疲れたわ。つーかさ、どうやったらこのゲームからログアウトできるのかねえー」

「わかんねーよ。俺も知りてえわ」

「……まあいいか。まずは、あのムカつくあいつらをブチころがすのが先だな」

「ああ、早く戦いてえぜ。疲れてんのに、何でかな。しかも、無性に腹が立ってんだよな、今」

そう言った後、アルトリウスは良からぬことを考えた。

あれ、負けたのってこいつのせいじゃね？ とつとこいつが加勢してくれば、俺があんな風に負けることなんて――。

そこまで考えたところで立ち上がる。冷めた目をオーンスラインに向け、アルトリウスはすつと剣を抜いた。



プレイヤーの一人、ユースケはさながら、ゲームや漫画の主人公になった気分だった。自分の作ったこのキャラが、ありきたりなラノベ主人公の様な風貌をしていることも、一役買っていた。

エ・ランテルという町。そこで冒険者登録をしたのがつい6日前のこと。依頼はどれも、彼にとつては簡単なものばかりだったが、依頼をこなせば賞賛され、ランクがすぐに上がった。

あとはハーレムさえできれば完璧だな――。

厭らしい妄想をしつつ、彼はエ・ランテルにある、暗くなった共同墓地を進む。

今回の依頼は、最近増加しているというスケルトンの討伐だ。

共同墓地の中腹辺りで、早速討伐対象のスケルトンを数体発見する。ユースケはグレートクラブを担ぐと、スケルトンを複数体まとめて叩き潰した。横に薙げば、動く骨は吹き飛んで、あつという間にバ

ラバラになる。

1分もしないうちに、周りのスケルトンは全滅した。こんな簡単な仕事で、お金と名声が貰えるなんてラッキー。彼はそう思いながら、帰路につく。

「はあい、お兄さん」

いきなり、背後から声をかけられた。周囲には誰もいなかったはずだが――。

驚いて振り返ると、そこには紫紺色のマントに身を包んだ女性がいるた。

金色の髪をボブカットにした女性だ。鋭い瞳に、歪んだ口元が特徴だった。

「び、びっくりした。き、君は誰だい？ それに、ここはスケルトンが徘徊しているから危ないよ？」

親切心から、そういった台詞が口を衝いて出たが、ユースケはおかしいことに気が付く。

ここは、最近になって危険になったと知られている墓地だ。一般人だったら、まず近寄らない。

「あ、私はクレマンティーン。まあ、確かに、ここは危ないかもねー」  
「……クレマンティーン、さん。君は何者だい？」

緊張したユースケは喉を鳴らした。嫌な感じがするのだ。

「ねえねえ。どうして白金級冒険者の自分が、こんな簡単な依頼に指名されたのか？ って、疑問に思わなかった？」

「え……？ どうしてそのことを知ってるんだ――」

ユースケの言葉は途中で遮られた。彼が咄嗟に横に跳んだためだ。さつきまで彼の居た場所には、ステイレットの切っ先があった。

冷や汗が流れる。

何故自分がこの女性に命を狙われるのか、ユースケには見当もつかない。

「ちよ、ちよっと待ってくれ！ なぜ攻撃をするんだ！」

「なぜって、そんなの……こういうことをするのが、趣味だからに決まってるじゃない」

(や、闇霊だこれー！)

ユースケは依頼を受ける前に戻りたい気分になった。彼は対人戦や、闇霊との戦闘が、この上なく苦手なのだ。

「うふふふつ。さっきの身のこなし、結構いい感じだったわよ？」

さあて……それじゃあ、次はどうかしら、ね！」

一瞬で、クレマンティーヌはユースケとの距離を縮めた。ステイレットを突き出し、ユースケの左肩を狙う。

「わあああつー！」

情けない大声を上げ、ユースケは地面を転がる。

クレマンティーヌの素早い一撃をかわせたのは、彼にとって奇跡に近かった。

(やべえよ、やべえよ……あの女イカレてるよ)

まずは回避に専念しよう。今のままだと、『ドッスン』だから、グレートクラブは外そう——。

ユースケはグレートクラブを装備から外し、右手と左手に、異なる剣を装備した。

「ううん？ さっきまでアンタでつかい獲物持ってたよね？ どうやって隠したの？」

グレートクラブは身の丈以上もある大きさだ。それが忽然と消えたことに、クレマンティーヌは首を傾げた。手元で“魅了”の付加されたステイレットを弄りながら、ユースケを観察する。

「くっ……」

「ねえ、訊いてるんだけど」

「……」

「だんまりか……じゃあいいわ。お姉さんが、話したい気持ちにさせてあげる」

武技を使い、一気に標的の懐へと潜り込む。先ほどと同様に、ユースケの左肩を狙っての一撃を放つ。

だが、その一撃は、右手に持ったシャープな形をした短剣によって逸らされる。

ユースケの構える短剣と刺剣。それらは、一目見てわかるほどの業



物だった。

刺突剣を好んで扱う身とすれば、是非とも欲しい一品だ。クレマンティーンは、口端を釣り上げ、舌なめずりをした。

「く、くそおおおー」

恐怖と緊張に耐えれなくなったユースケが、右手の短剣を突き出す。あまりにも、拙い攻撃だ。

武技を使うまでもなく、クレマンティーンは屈んで避けると、下からの蹴り上げを見舞った。

「あつー」

宙を舞うユースケの短剣。

奪う絶好のチャンスだ。クレマンティーンは両手を地に着けると、背を向けての渾身の蹴りを放った。

「ぐあつ」

ユースケの身体は宙に浮き、数メートルは吹き飛んだ。

空中でくるくると回りながら、自由落下をする短剣。それを難なく掴んで手に入れる。

クレマンティーンは奪い取った獲物に、笑みを浮かべた。

「良い武器持つてんじやん。まさに、宝の持ち腐れってやつね」

「ふ、ふざけんな！ それは俺がマックスまで鍛えた武器だぞ！ 返せ！」

「あんたが作ったの？ ふうん？」

返せと言って凄んではいるが、ユースケはもうすでにへっぴり腰だった。クレマンティーンは左手に持った短剣を一瞥すると、視線を前に戻した。

「私、この武器気に入っちゃったあ。だからさあ、そっちのも……頂戴」

ねつとりと、絡みついてくるような甘い声。短剣に舌を這わせる姿。

ユースケには、目の前の女が、人の皮を被った化け物にしか見えなかった。

「じゃあ、次はこっちから行くわね」

再度行われる、急加速の突進。

ユースケは驚いて、接近を許さないように、左手に持った刺剣で切り払いを行う。

「不落要塞」

「えっ?」

ユースケはパリイされた。

無様に尻餅をつき、致命的な隙をさらす。

クレマンティーヌが壮絶な笑みを浮かべた。右手に持ったステイレットが、鎧を壊して貫通したのが見える。

左肩に走った激痛に、刺剣を落としてしまう。これで、彼はインベントリから取り出さないう限り、無手の状態だ。

「はああ……すごく良い」

苦悶の表情を浮かべる顔を見て、クレマンティーヌは恍惚の表情を浮かべる。

「ぐう……く、くそっ!」

「あらあ? アンタ、魔法耐性高いのね」

魅了の付加されたステイレットの一撃を受けて、魅了状態にならない。そのことに多少驚きはしたものの、それも時間の問題だろう。

クレマンティーヌは腰に挿してある2本目のステイレットを手にすると、ユースケの右足を地面に縫い付けた。

「ぎゃああああ!!」

「あー、もう、少しうるさい」

「がつ……あ、あ……」

叫ぶのを唐突にやめ、目の色に変色する。

「ふふ……じゃあ、教えてもらおうわよ。あなたのこと……」

魅了によって得た情報によれば、シャープな形をした最初に奪った短剣は、「夜の短剣」という名前らしい。もう2本目は「鎧貫き」という名の刺剣。2本とも、切れ味最高の逸品である。

また、興味深いことに、殺害した彼は、「ダクソプレイヤー」とい

う存在のようだ。

「プレイヤーねえ……ちっ」

殺した瞬間に、灰となって消えた事象が、まったくもって理解できなかったが、彼を含めた『ダクソプレイヤー』は不死身らしい。不死身であり、篝火というものの傍で復活する。

ということは、復活後に報復してくることが考えられる。しかも、死なないから永遠にだ。魅了で縛ろうにも、効果時間に制限がある。風花聖典のことだけでも面倒なのに、さらに厄介事を増やしてしまった。

また、篝火という物も何かわからない。ただの明り火なのか、それとも特別な焚火なのか。それが、どうして復活に関係があるのか。

「ああー、もうっ。わっけわかんない」

わからないこと尽くしで、いらいらしたクレマンティーヌは、頭をがりがりと引っ掻いた。

「まあ、いつか。良い物手に入れられたしねえ……」

手に収まった両剣を見つめると、クレマンティーヌは満足気な笑みを浮かべた。



『それでは、マッチさんたちは、カルネ村に残るんですね？』

スパルタカスは、城塞都市エ・ランテルへ向かいながら、数日前のカルネ村でのやり取りを思い出していた。

「俺、だるいからここに居るわ」

広場の篝火の前、そうやって欠伸するアカを、スパルタカスは白い目で見た。

（こいつ青ニートかよ。くそ使えねえ……）

「そ、そうですね。では、村の人たちと協力して、何とか帰る方法を探

して見てください」

そう言つて、スパルタカスは作り笑いを浮かべた。

村長から、すでにプレイヤーたちへの報酬として、空き家を2軒頂戴している。悪きさえしなれば、居住くらい許されるだろうが、ニートを置いておくなど心配だった。何もしない癖に、飯よこせ、娯楽よこせ等々言われたら、せつかく築いた村との関係が悪化してしまう可能性があるからだ。

その対策として、何か良い方法はないものか――。

「おうふ、何やら召喚サイン作れますぞ」

シコシコの戯れによる実験は、非常に良いタイミングだった。白いサインろう石は、プレイヤーを霊体として呼べるサインを書き込むアイテムだ。そして、書き込んだ名前のプレイヤーが、呼んだ者の元に仲間として派遣される。

気は進まないが、これで、何かあればすぐにでも、カルネ村に駆けつけることができるようになるというわけだ。

「お、いいつすね。アタシも書く」

「私も書いておくか」

「おいらも」

「俺も」

「おいどんも」

プレイヤーたちが次々に、篝火周辺にサインを書き込んでいく。

「おい。近すぎて俺とおまえの名前、ドッキングしてんじゃねーか！」

「知らねーよ！ お前がこつち側に書き込んだからだろうが！」

「あー！ アタシ、自分の名前のスペル忘れたつす！」

「お前、馬鹿だろー！」

四つん這いになり、白い石を地面に擦りながら、プレイヤーたちがぎやあぎやあと喧しく騒ぎたてる。

「何も、広場に限定する必要はないだろう」

スパルタカスの言葉に、プレイヤーたちは顔を見合わせた。

そして、一拍置いて、

「おっしやあー！ エンリたんの部屋にサイン書いてくるぜー！」

「おうふ、では拙者はお風呂場に書いてきますぞ」

「ベッドの上に書いてくるか……呼ばれたら即行で寝よ」

「うひょー、俺は屋根の上を書くぞ！ いいな！ 屋根の上だからな！ ぜってえ忘れんなよー！」

蜘蛛の子を散らすように、プレイヤーたちはばらけていく。

一人、篝火の前に残されたスパルタカスは、バカっぽい奴らだな、と呆れ混じりのため息をついた。

「まあ、俺も書きに行くか」

そう呟くと、スパルタカスは若い女性の住む民家へと、歩を進めるのだった。

エ・ランテルへ到着したスパルタカスたちは、ガゼフが、

『クラীগゲ殿は元一国の国王とのことなので、王都へ入るのはしばらくお待ちいただきたい。陛下に事情を説明申し上げ、許可が下り次第、追って使者を出すようにしますゆえ……、その後に王都へ来ていただきたい』

と言つて、すぐに王都へと発つてしまったために、エ・ランテルにしばらく滞在することが決定した。

人通りの多い路上。

プレイヤーたちは物珍しそうに、中世風の街並みを見学している。「スパルタカス殿、この建物に入ってみて良いでござるか？」

シコシコが周りよりも一際大きな建物を指した。

中には人が多くいるのか、喧騒が聞こえてくる。

ガゼフからの使者が到着するまでは、基本的に自由行動を許している。スパルタカスは頷き、入るよう促した。

建物の中へ入ると、そこはラウンジとなっており、軽装の鎧を着た男たちがテーブルを囲んで座っていた。正面には受付嬢らしき女性もいる。

何らかの施設だろうか――。

スパルタカスは、にやにやしながらこちらを見る男たちを一瞥し、受付の女性へと声をかけた。

「すみません、お聞きしたいことがあるのですが」

「はい、いかがなされましたか？」

「あの、ここはどういった所なのでしょうか？」

その質問に、女性は一瞬目を見開いたが、すぐに笑みを浮かべた。

「こちらは、冒険者組合になります」

「冒険者組合？ ギルドみたいなもんか？」

「あの……お客様。お客様は、冒険者組合にご登録なされるためにこちらへ？」

受付嬢の言葉を聞いていた、後ろのシコシコたちが興奮した様子で

何かを語り始めたが、喧しいので無視する。

「なぜです?」

「あ……申し訳(ご)ぎいけません、依頼の方でしたか?」

スパルタカスの言葉に、受付嬢は意外だと思った。彼の恰好はどう見ても、戦士だとか傭兵だとか、そっち系のものだ。

「い、いえ。何か依頼を頼みに来たわけでもないのですが……」

「えつと……?」

菌切れの悪いスパルタカスに、受付嬢は困った。お客がどういう要件でここを訪ねてきたのか、それを話して貰わないと、彼女は対応のしようがないのだ。

「ふっふっふ……ここは拙者に任せてもらおうか」

「シコシコさん?」

シコシコはスパルタカスの肩を掴み、彼を下がらせる。

すると、彼は受付嬢と相対する形となる。

「きやあつー!」

目の前にいきなり現れた腰巻一枚の変態に、受付嬢は顔を真っ赤にして、悲鳴を上げた。

悲鳴を聞いた周りの冒険者たちが、何事かと思ひ、スパルタカスらの方を見た。そして、殺氣づいた。

受付嬢が、変態に襲われていると勘違いしたのだ。

「おい、そこの変態! 早くその嬢ちゃんを解放しやがれ!」

「何かしやがったら、ぶっ殺すぞ!」

「ええ……?」

特に何もしてはいないのに、がたいの良い男たちから暴言を吐かれるシコシコ。しまいには、ガンを飛ばされたまま近寄ってこられる始末。

そんな状況に彼は戸惑った。

「何だ、何の騒ぎだ!」

騒ぎを聞きつけたのか、一人の男が両者間に割って入ってきた。

その男の首元には、白金のプレートがある。彼は白金級の冒険者だった。

しかし、目を引くべきはそこではなかった。

鼻をすつぽりと覆う兜に、白色の鎧。その恰好に、シコシコたちは見覚えがあった。

その「玉座の監視者」シリーズに身を包んだ冒険者も、シコシコの恰好とスパルタカスらの恰好を見て、見覚えがあると感じた。

そして当然の流れとして、両者は口を揃えて、

『ダクソプレイヤー？』

と言うのである。



エ・ランテルにある最高級宿屋——黄金の輝き亭。

その宿の一室は現在、むさ苦しい男5人によって占領されていた。

銅色の鎧に身を包んだ男、ほぼ全裸の男、鶏冠付きの兜を付けた男、バケツ頭の銀騎士、そしてこの一室を借りている、白色の鎧の男。

スパルタカスや白色の鎧の男のおかげで、何とか冒険者たちからの誤解を解いたシコシコは、白色の鎧の男の好意により、この一室に身を置いているのである。無論、この一室の借主は、白色の鎧の男である。

「いやー、申し訳ない。ウザベルさんのおかげで助かりましたぞ」

「いえいえ、困った時はお互い様ですよ。それより、村に向かったはずの皆さんが、ここを訪れているなんて意外でした」

白色の鎧の男——ウザベルは、頭を軽く掻きながら言った。

「村自体は特に見るべきもない所でしたし、留まる理由もありませんからね」

スパルタカスはそう言って、鶏冠付きの兜を外して手に持った。

カルネ村は、6つの篝火とプレイヤーたちの召喚サインがある以外は、彼らの興味を引くものは全くなかった。

今のところは、用済みというわけである。



「そうでしたか。それで……何かわかったことはありますか？」

「篝火と召喚サインのことや、この国の情勢について、少しばかり」

「よければ、情報交換をしませんか？ 勿論、こちらはこの世界について知り得たことすべてを話します」

ウザベルの提案に、スパルタカスは首を縦に振った。

エ・ランテルに今までいたプレイヤーとの情報交換は、彼からすれば、未知の情報を得るまたとない機会だ。断る理由がなかった。

スパルタカスはシコシコに目配せし、ウザベルに今までのことを纏めて話すように、言外に頼んだ。シコシコはふざけたなりと言動をした男だが、要点を纏めて話すのは、自分よりも上手かった。

適材適所というやつだ。

「ふふふ……。では、拙者たちが村で何を見て、何をしてきたのか……それを話しますぞ——」

こちらの出した情報は、篝火や召喚サインの作り方、六色聖典との対峙やガゼフとの共闘、これから彼に雇われることになっていることなど、要点以外の無駄を端折ったものだった。端的にまとめられており、よくできているとスパルタカスは感心した。

ウザベルはシコシコの話聞き終わると、少々驚いた様子で、

「ボスなんているのか……」

「逃がしてしまった敵が召喚してきたんですぞ」

「そうか。なら、もしかしたら……この街にも、『ボス』がいるかもしれない」

「なに？」

ウザベルの予想だにしない台詞に、スパルタカスは思わず椅子を蹴って立ち上がった。彼は、失礼、と一言いうと、再び椅子に腰かけた。

それを確認したウザベルは真剣な眼差しで、それでは続けます、と言って他4人の顔を見回した。

「スパルタカスさん。俺はここにいるハゲピカさんと一緒に、冒険者として行動を共にしているんだが……」

と、言って、ウザベルは髭面の兜を被った銅色の鎧の男——ハゲピ

力を指した。

「俺たちとはチームを組んでいない、ソロプレイをしていた白金級冒険者のプレイヤーが、2日前に忽然と姿を消してしまったんだ」

「他の街へ移ったのではないのか？」

腕を組んだワイが訊いた。

「その可能性も考えられますが、彼は依頼を受けている状態でした。しかもその依頼内容は、共同墓地のスケルトンの討伐というものだったらしいです」

「共同墓地？ スケルトン？ 随分ときな臭くなってきたな」

「やはり、ワイさんもそう思いますよね」

スケルトンといえば、ダークソウル2は言わずもがな、ソウルシリーズの定番モンスター的一种だ。それが、この街の墓地にいるという。それだけで、もうすでに怪しい。

「その共同墓地というものの規模は？」

「かなり広いです。ダークソウルのあの地下墓地と同等か、それ以上です」

ウザベルのその言葉に、ワイたちは確信に近い物を得た。

この共同墓地には、ボスがいる。そして、行方不明となったそのプレイヤーは、おそらくそのボスに敗れたのだろう――。

「少し探索してみたいですな……今から行つてきてみても、よござんすか？」

「私は他のメンバーの様子を見てこなくてはならないんで、同行しませんよ」

「私は先の戦いでボスのソウルを取らせていただいたからな。今のところ、ソウルは足りている。行きたいのなら、貴殿一人で行くとよい」

スパルタカスとワイは、シコシコの提案にあまり乗り気ではなかった。両者とも、自ら危険を冒すような性格はしていないのだ。

「ウザベルさん、ハゲピカさんは来ていただけますん？」

シコシコは、僅かな期待を込めて言った。彼の目は、捨てられた子犬のような、どこか同情を誘うものがあった。

しかし、ウザベルらにも事情というものがある。

二人は、申し訳なさそうに首を振って断りを入れると、今日の午後からオークの討伐を行う旨を告げた。

「そうであるか……残念無念！ あっ……とところで、スケルトンの出現は昼夜関係あるのですか？」

「確か、聞いた話だと、夜の方が出現しやすいとは聞きましたが」「なるほどっ！」

と、言って手をぽんつと叩いたシコシコは、ウザベルに感謝のお辞儀をすると、窓を開け、そこから飛び降りて出て行ってしまった。

窓下の街道で、女性の悲鳴が中心となった大騒ぎが起きているが、スパルタカスらは我関せずを決め込んだ。

（あ。そういうえばシコシコさんに、皆が今夜どこに泊まることになっているのか、教えてねえわ。……まあ、どうでもいいか。あの変態なら、どんな事が起きても死なないだろ）

シコシコの身の危険など、取るに足らない些事だ。スパルタカスは、この場を離れた男のことを意識から除外する。

「ウザベルさん。それで、何か他にわかったことはなんでしょうか——？」



太陽が顔を隠してしばらくの時間がたった。共同墓地は、不気味な静けさを纏っている。

共同墓地への入り口、門を守っている門兵は、アンデッドが出る可能性に微塵も危機感を感じていないのか、暢気にも欠伸をしていた。だから気が付かなかつた。気配を忍ばせて近づいてきていた存在に。

「でゅふふふふ……失礼しますぞ」

「わああああっ！ な、何だ貴様は!?!」

いきなり目の前に現れた半裸の男に、門兵はパニックを起こした。

彼は反射的に、その男に向かって手に持つ槍を突き出した。

「ああ、拙者は怪しいものではないですよ」

「いや、見るからに怪しいのだが。それより、何用だ！ どのような要件でここを訪れた!？」

「散歩」

「は?」

「あ、駄目でやんすか?」

「駄目に決まっているだろう！ この奥はゾンビやスケルトンが出現する共同墓地だぞ!」

ふざけたことを言う目の前の変態に、門兵はキレた。

しかしながら、目の前のそいつは、その程度で引くようなタマではなかった。

「ならば、仕方あるまーい!」

門兵は虚を突かれた。あろうことかその男は、門兵を横切ると、門の上に繋がる階段を駆け上がり始めたのだ。

「ま、待たないか!」

必死に追いかけるが、彼が門の上へと辿り着いた時には、すでにその姿を見失っていた。

門兵を撒いたシコシコは、スケルトンを右手一本で葬りながら、共同墓地を進んだ。

門の上から飛び降りてから、ひたすらまっすぐ進んできたが、どうも変わり映えしない景色が続く。どこもかしこも、同じような墓が乱立する映像一色だ。

もしかして迷ったか?

不安になった彼が、そんなことを思い始めた時だった。

目の前に、神殿のような立派な建造物が見えた。

(おっ!・これはボスの予感!)

期待と興奮が入り混じる中、彼はしつかりとした足取りで、その建造物を目指した。

道中、不思議な事にスケルトンらの襲撃がなく、彼は難なく入口の

目の前まで辿り着けた。

だが、その瞬間に、彼は強烈な殺気を感じて、顔を後ろに反らした。瞬間、風切り音がして、彼の鼻筋を何かが掠めた。

シコシコが掠めた何かの方を見ると、それは不敵な笑みを浮かべて、こちらを見つめていた。

「いやあ、やるねえあんた。ただの頭おかしい露出狂かと思ってたよ……」

突くことだけに特化した刺剣を舐め、その舌をこちらへと向けてくる女性——クレマンティヌ。

彼女は笑みを浮かべ、余裕のある体を装ってはいるが、内心では動揺していた。

先ほどの一撃は、彼女にとって、文字通りの必殺の一撃だった。気配は消していたし、気付かれてもいなかった。しかも、武技能力向上、能力超向上、疾風走破、流水加速の四重掛けを行っての一撃だ。外すなんて、ましてや避けられるなんてありえない。

「……」

「な、なに……?」

殺気を向けられ、あまつさえ攻撃をされたにもかかわらず、シコシコは黙ってクレマンティヌを見つめていた。特に何の感情も表わしていない彼の表情、その気味の悪さ、不愉快さに、彼女は動揺を見せてしまった。

「な、何者だてめえ!」

“鎧貫き”をシコシコに向け、吠えるように訊く。彼女の声色には、若干の怯えが混じっていた。

そんな彼女の様子を見たシコシコは、左手を顎に添えると、

「暗殺者系強気っ娘か……新しいな」

「はっ」

シコシコの台詞を理解できないクレマンティヌは、口を半開きにしたまま、数秒固まった。が、すぐに持ち直すと、

「何者かって訊いてるんだけど?」

と、声色をいつものように戻して訊いた。なんとか、先ほどの動揺

が治まったのだ。

しかしながら、相手は自分を動揺させるほどの身のこなしの男。変態だろうが、油断はしない。

と、ここでシコシコは、彼女の右手に握られているものに目がいった。

「拙者の名前はシコシコ。一つ聞きたいのだが、その右手の武器は——」

「ああ、これ？ いいでしょー？ よわっちい奴が持ってたから、貰ってあげたの」

「それを持っていたのは、もしや……白金級の冒険者ではないか？」  
「へえー、よく知って——!!」

シコシコの台詞に、クレマンティーヌは驚愕を浮かべた。

まさか、もうダクソプレイヤーが復讐しに来たのか——？

そう思った途端、彼女は背筋が冷たくなるのを感じた。彼女は、自分が高を括っていたことに気が付いた。

他のダクソプレイヤーも、この前殺した、あの男程度の奴なのだろうと思っていた。しかし、実際は違った。己の全力の一撃を、しかも死角からのそれを、何のことはなしに避けてしまうような奴だったのだ。

「ちっ」

「おおー、気の強そうなその顔。非常にグッドですぞ」

こっちは殺気を放っているにもかかわらず、ウインクをして親指を立ててくる変態。そのふざけた態度が、クレマンティーヌの神経を逆なでする。

「てめえ……殺すー」

先ほどの一撃同様、武技を四重に掛ける。姿勢を低くし、一気に駆ける体勢をとる。

こんな変態より、私の方が上だ。

クレマンティーヌはそれを証明するため、余裕を見せてからシコシコを殺そうと考えた。

「そんじゃあ、行きますよー」

そう声を掛けてから、突進を開始する。

彼女の眼前に、直立不動のシコシコが迫った。

なぜ動かない？

攻撃や防御、回避の気配すら見せないシコシコに、クレマンティーヌは不信感を抱いた。

だが、もうそんなことはどうでもいい。あとは、右手の刺剣を眉間に打ち込んで終わりだ。

そう思い、右手を突き出す。しかし、その攻撃は、空を切った。

それと同時に、突然、彼女の視界が高くなった。そして、感じる浮遊感。

「取ったどおー！」

「ぎゃっ!!」

首筋に奔る痛みには、クレマンティーヌは猫のような悲鳴を上げた。彼女が気付いた時には、彼女はシコシコに捕らえられていた。猫のように首根っこを掴まれ、右手一本で、その身体を持ち上げられていた。

シコシコが仕出かした人間離れた荒技に、クレマンティーヌは我が目を疑った。彼はあろうことか、刺突攻撃を左手でいなし、続けざまに彼女の首を掴んで持ち上げたのだ。

自分の攻撃をかわすどころか、逆に捕らえてくるなど……。

クレマンティーヌは愕然として、顔を下げた。そして、気付いた。

彼は、自分が襲いかかったときから、一歩も動いていない。

2回も本気で攻撃を仕掛けたのにもかかわらず、一度も攻撃を当てることなく、しまいには捕らえられた。

ズタズタに引き裂かれたプライド、これからのことを考えた時の恐怖。これらが、クレマンティーヌの中を支配した。

「ん、ぐう……くっ！ は、放せ！ くそ、この野郎！」

自分を拘束している右手を、殴ったり蹴ったりするが、びくともしない。

刺剣を突き立てようと振るうも、狙い澄ましたかのような、左手による華麗なパライイに、刺剣は手元を離れていった。愛用しているステイレットを取り出すが、それもまた1本、2本……、とパライイによつ

て弾き飛ばされていく。最後の武器であるメイスなどで、彼の拳とかち合った結果、柄以外が崩壊してただの棒切れとなってしまった。

シコシコの誇る人間離れした肉体と身体能力、圧倒的な技量による実力差を実感し、クレマンティーヌは口をわなわなと震わせた。

あまりの恐怖に、歯がカチカチという音を立てる。

「およう？ もう抵抗しないんか？」

右手を僅かに下げ、ずいっとクレマンティーヌに顔を近づける。

「ひっ！ ……お、お願い！ ……な、何でもするから！ ……い、命だけは！ ……命だけは！ ……」

目に涙を浮かべ、嘆願する。

クレマンティーヌの必死な哀訴を聞いたシコシコは、ん？ と言って首を傾げると、

「今、何でもするっていったよね？」



シコシコに捕らえられたクレマンティーヌは、逆らう気力さえ残っていないかった。武装はすべて解除され、今は武器を一つも持っていない。後ろに落ちている刺剣は、シコシコを振り払って取るには遠い距離だ。しかも、振り払うことは不可能だと、さっきのでわかった。はつきりいって、詰んでいる。

彼女は意気消沈した様子で、シコシコの出方を窺った。

「では、まず……。手始めに君のことを教えてもらおうジャマイカ——」

そういって、シコシコはクレマンティーヌを降ろした。彼女は解放されたことによる安堵感と、目の前の男への恐怖心により、その場へあたり込んだ。

まるで、こちらが虐めているみたいじゃないか。

先ほどと打って変わって弱弱しくなった彼女に、シコシコはやり過ぎたか、と少々後悔した。

「私の？ 一体、何を話せば……？」

「でゆふ。最初は名前からジャマイカ？」

「名前は……クレマンティーヌ」

「ほう、クレマンティーヌ！ じゃあ、クレマンたん……いや、変だからよしとこう」

「訊きたいのは、名前だけ？」

「いんや、もつともつとあるはずぞ。しかし、ここでの質問タイムはあまりよろしくないですのお」

いつの間にか、複数体のスケルトンが彼らを取り囲んでいた。シコシコは石ころを拾ってそれを投げつけ、囲んでいたスケルトンを倒すと、

「クレマンティーヌたん。武器とマントを取ってくるがよい」

「えっ？ お前、正気か？」

敵対者にわざわざ反撃する、逃亡する機会を与える。そういった馬鹿な事を言っているシコシコに、クレマンティーヌは自分の耳を疑っ

た。

だがその台詞は、両者間の實力差が雲泥の差だからこそ出てくる言葉だ、ということも彼女は理解していた。

駄目だ。武器を手に入れて反撃しようにも、武技を使って全力で逃げようにも、奴から逃れられる未来が見えない――。

そう逡巡しているうちに、周りのスケルトンらはいなくなっていた。

やはり、この変態は化け物だ。

クレマンティーヌはとぼとぼと歩き、散らばる5本の剣を拾い上げた。そして、顔を下にさげながら、大人しく戻ってくる。

「ぐふふふ……では、ウザベル殿の元へ参りましょうぞ」

夜も深くなってきた時間。こんな時間帯に部屋を訪ねてくる者が、まともなわけがない。

ノックの音が響く室内。ウザベルとハゲピカは、武装した状態で、勢いよくドアを引いた。

剣を訪ね人に突き付け、牽制する。

「おおっと、拙者ですぞ。犯人を捕らえてきたから入れて欲しいですぞ」

訪ね人はシコシコだった。相変わらずの変態だったが、ゲーム内では見慣れた存在のため、不快な感じはしなかった。

ウザベルは、犯人？　と言って首を傾げた。

「白金級冒険者のプレイヤーが失踪した件でやんすよ」

「その犯人をですか!？」

「この子でやんす」

シコシコの横から、クレマンティーヌが顔を覗かせた。それと同時に、彼女は顔面蒼白になった。

ウザベルと呼ばれる男ともう一人の男。同じ戦士だから感じ取れる雰囲気からして、彼ら二人は少なくとも、漆黑聖典の隊長と同等以上の怪物だった。

なぜ神人クラスの化け物が2人もいるんだ……。

半ば放心したクレマンティーヌは、シコシコに手を引つ張られ、共にその部屋へと入った。

ウザベルはドアをすぐに閉めると、彼に事情の説明を求めた。「端的に順を追って説明しますぞ。よござんす?」

『よござんす』

ウザベルとハゲピカが合わせた。二人は、シコシコの見たと言動から、彼がどういうタイプのプレイヤーなのかを理解していた。

「えー。まず、墓地へ行きました。ボスイそうな神殿見つけました。その前でクレマンティーヌさんに襲われました。捕まえました。帰ってきました。はい、以上!」

「みじかつ!」

「ええ〜……。他にもつと説明するべきことあるでしょうよ」

「いや、いや。拙者から話すことはこれだけですぞ。あとは——クレマンティーヌさんの口から聞くことにしましょうぞ」

クレマンティーヌは3人に見つめられ、反射的に身を引いた。

「クレマンティーヌさん!」

いきなり、シコシコにがしつと肩を掴まれ、クレマンティーヌは肩を尖らせた。

「な、なに……?」

「これから拙者が質問をしていくんで。嘘偽りなく答えるように!」

「わ、わかった」

ゆつくりと頷く。クレマンティーヌは、言われなくても嘘を言うつもりはなかった。

彼らはそもそもこの世界の住人ではない。本当のことを言おうが、嘘を言おうが、今の時点では判別できないだろう。だが、彼女の現在の精神では、とても上手く嘘をつける状態ではなかった。どこかしらに綻びが出て、すぐにばれてしまうだろう。正直、本当のことを話すよりも、嘘をついた後の方が怖かった。

「質問その1。クレマンティーヌさんの出身とご職業は?」

「出身は……スレイン王国。今は、秘密結社ブローラーノーンに所属して——」

「ツララーノン？ 育毛剤研究施設か何かでござるか？」

「いくもうざい？ いや、その……研究施設ではなくて……ネクロマンサーやマジックキャスターが中心となってできた魔術結社で……」  
「ふうん」

「そういうえば先ほど、今はと云っていたな。昔はその『ツラノン』とかいう組織とは、別の組織に居たのか？」

険しい表情をしたウザベルが訊いた。リアルな彼は、薄毛で悩んでいるのだ。

「昔は……、スレイン法国にいた時は、漆黒聖典に所属してた」

「漆黒聖典？ もしやそれは、六色聖典とかいう連中の一つジヤマイカ？」

シコシコの口から出るとは思いもしなかった単語に、クレマンティーヌは目を丸くした。

まさかこのプレイヤーは、法国のまわし者なのでは？

彼女は一瞬そう思ったが、かぶりを振って、それはないと思い直す。まわし者なら、ここに風花聖典がいなければおかしい。それに、殺したプレイヤーの記憶がおかしいわけではないのなら、こいつらがここの世界に来てから、まだ10日も経っていないはずだ。

「そうだけど……。どうして、六色聖典を知っている？ 法国に行つたの？」

「いや、行ったことはないですぞ。その六色聖典の一つの部隊に、拙者たち、喧嘩を売られたでやんす」

「喧嘩を、売られた？」

クレマンティーヌはシコシコの言っていることが理解できず、首を傾げた。六色聖典が、強いとはいえ、一介の冒険者たちに攻撃を仕掛けるなんて考えられなかった。

「天使とかいうのを召喚してくる連中でやんすが……知ってるみたいどすな」

天使というワードを聞いて、クレマンティーヌの表情が動いた。シコシコは、それを見逃さなかった。

彼らから向けられる鋭い視線に、クレマンティーヌは喉を鳴らす

と、ゆっくりと口を開いた。

「……その部隊は、陽光聖典よ」

「陽光聖典……ふむふむ。では、質問その2。漆黑聖典を抜けた理由をくわすく」

「抜けた理由……？」

クレマンティーヌは言い淀んだ。これに関しては、彼女は誰にも話したくなかったが、場合が場合だ。彼女は、その抜けた理由を話した。

双子の兄に反発したことや両親のこと、法国での身の上を彼女は語った。

「おうふ……結構えぐいの」

クレマンティーヌの話に、シコシコは顔を顰めた。そんな彼の様子に、クレマンティーヌは僅かな希望を見出した。

あの男は情に流されやすいタイプだ。彼女はそう感じた。そこを利用しない手はない。

そう思ったのだが――

『だから、その……私……、辛くて』

悲劇のヒロインのような声色を出し、目に涙をにじませる。そこらの男なら、ころっと騙せる自信が彼女にはある。

『嘘をつくなど言っただろうが!!』

しかしながら、変態男の目は騙せない。演技は即行でばれ、殴り飛ばされる。

――という、ここまでの流れを彼女は幻視した。

(やっぱ、泣き落としはやめとこう)

クレマンティーヌは余計な事を言わないよう、自ら口を噤んだ。

その仕草に何を誤解したのか、シコシコは、

「おお、かわいそうにー」

などと哀れんできているが、彼女にとっては好都合であれ、不都合ではないのでそのままにしておいた。

「シコシコさん。今度は俺の方から質問させてもらっても？」

ウザベルが訊いた。シコシコは元からそうするつもりだったため、二つ返事です承した。

「単刀直入に聞く。ユースケというプレイヤーを殺したのは、君か？」  
「っ……」

来るとわかっていた質問だったが、いざとなると、返答に詰まる。クレマンティーヌは言葉を出さずに、口を開閉させた。

だが、ウザベルは彼女の返答を待たず、もう一つの問いを投げかけた。

「……それともう一つ。近頃、冒険者たちが多数行方不明となっているのだが、その犯人も君か？」

彼はクレマンティーヌの、マントの隙間から覗く防具を見て言った。彼女の軽鎧には、冒険者のものと思われるプレートが、所狭しと飾られている。

訊いている体だったが、ウザベルは彼女が犯人だと確信していた。さっきの言葉は、ただの確認に過ぎなかった。

「あ、あんたたちの仲間だと知っていたなら、手に掛けたりなんてしなかったわ！」

叫んだクレマンティーヌは、必死に言い訳を考えた。

この男たちはまだ、ズーラーノーンのことや、自分が快樂殺人者であることは知らない。ならば、そこをうまく隠せば、この場をやり過ごせるかもしれない。

「いや、仲間じゃねえし」

「えっ……っ？」

あれこれ言い訳を考えたクレマンティーヌは、予想だにしない言葉に、言い訳のことが頭の中から吹っ飛んだ。

「仲間じゃない……っ？」

「およう？ ウザベル殿、拙者初耳ですぞ」

クレマンティーヌほどではないが、シコシコも驚いた様子で、ウザベルに訊いた。

「だって、あいつ……、むかつく野郎だったし……。ねえ、ハゲピカさん？」

「ああ、チーレム脳の糞ドキュンだったぜ。プレイヤー同士、せつかくだからメンバーになってくれないかって頼んだら、『君たち、僕よりも

ほんのちよつと、ほくんのちよつとだけ面がいいからダメ。気に入らない。それに僕、女の子以外とチーム組む気ないんで。しかも、何でわざわざガチムチなんかと組まなきゃいけないの？ 君たち、ホモ臭いよ』とか言いやがってよ」

ハゲピカは、ちつ、と悪態をつけてから、

「ざまあみろだわ」

と、嘲笑を浮かべた。

「ほうほう。では、そのユースケ殿の殺害の罪に関しては、本人がカスのため——、無罪で！」

「無罪で良し！」

「異議なし！」

呆気なさすぎる、非道徳的な無罪通告に、クレマンティーヌは頭痛を感じた。いったい、今までの心労は何だったのか。

しかし、今のこの状況は、第一関門を突破したに過ぎなかった。おそらく、次は自分の身に付けている、数多の冒険者プレートについて聞かれるだろう。

「まあ、あのカスはどうでもいいんだ。それで、そのプレートは一体どこから手に入れたんだ？」

「く……！」

どういう答えを出すのが正解なのか、クレマンティーヌは咄嗟には思い浮かばなかった。だが、この男たち3人組に囚われているよりは、冒険者組合につき出された方がマシに思えた。

彼女は冒険者プレート集めは趣味の一環であることや、人を苦しめることがこの上ない楽しみだということを、包み隠さず話した。

これは賭けだった。

もし、この連中にまともな感性があるならば、自分は組合に生きてまゝ連れて行かれるだろう。重大犯罪の犯人を捕らえるのに、生死を問わないものが多いが、情報を本人から聞き出せるため、組合側からすれば生きていた方が良い。そしてそういうのは、冒険者をやっているならば、当然知っているはずだった。

「ええ……。クレマンティーヌたん、暗殺者系強気っ娘じゃなくて、獵

奇系メンヘラだったでやんすか……」

「マジキチやわー」

「こええよ、こええよ」

三者三様の台詞に、クレマンティーヌは賭けに勝ったと思った。彼らは自分に引いている。なら、もうこれ以上は係わりうとは思えない。

さらにいえば、彼らは冒険者なのだから、手間をかけて自分を殺すよりも、手間もかからず報酬も多い引き渡しを選ぶだろう。

「メンヘラかあ……顔とボディは好みなんどすけどなあ……うん、メンヘラかあ……きついなあ……うん、だがしかし、拙者のハーレム王国には……」

シコシコは、クレマンティーヌが性格破綻者だと知って、少なからずの衝撃を受けていた。彼の頭の中では、すでに、クレマンティーヌは自分のハーレムの一員に入っているのだ。今さら抜かすわけにはいかない。

彼が悩んでいる理由は、彼女が快樂殺人者だからというわけではない。他のハーレム要員と喧嘩をしてみわらないか、ということに悩んでいるのだ。

メンヘラは、自分さえよければいい、他人はいくら傷つけてもいい、の構ってちゃんだ。他人との付き合いが苦手な人種だ。

彼は、そこが心配なのだ。

「女王様……合法ロリ……我がままボディ……最高ジャマイカっ!!」

下半身直結脳のシコシコは、迷いを振り切った。

一瞬だけ、うつとりとした表情を浮かべた後、

「ウザベル殿、ハゲピカ殿!」

「なんですか?」

「うん?」

「クレマンティーヌたんを、我らの王に裁いてもらいたいのでやんすが! あ! 我らの王というのは——」

この瞬間、クレマンティーヌの賭けは、負けに終わった。

「知ってます。クラーゲさんでしよう?」



ウザベルとハゲピカは、我らの王がクラーゲのこと示すことを、スパルタカス経由で知っていた。また、シコシコが窓から飛び降りていった後、彼らは隣室に泊まりに来たクラーゲたちとぼったり会っていた。さらにいえば、スパルタカスとの取引により、二人は定期的な情報を受け取ることを条件に、“ドラングレイグ王国騎士団”に籍を置いている。

「イエス、ザッツライツ！ 彼女の処遇をこっちが引き受けてもよござんすかっ!?!」

興奮し、鼻息荒く叫ぶ。

何興奮してんだこいつ——。

ウザベルとハゲピカは奇怪なものを見る目でシコシコを見た。二人は、クレマンティーヌのような異常な女の取り扱いは願い下げたため、シコシコの要求を快諾した。

「よし！ ではクレマンティーヌたん！」

クレマンティーヌは再び強く肩を掴まれる。

はあ、はあ、はあ……。

と、荒い息を吐くシコシコに、クレマンティーヌは、ひっ！ と、か弱い少女のような悲鳴を上げた。

そんな彼女などお構いなしだ。

シコシコは股間辺りの袋から、黄金滴る液体の入った壺を取り出すと——、それを彼女の胸にぶっかけた。

「な、何をしやがった?!」

溶けていく防具。溶け落ちていく数々のプレート。

露わになりそうな胸を必死に隠しながら、クレマンティーヌはシコシコを睨んだ。並みの人間なら恐怖に慄くほどの威圧感だったが、精神力の強い彼にとっては、子猫が威嚇している程度にしか感じていなかった。

「強力な酸の壺でやんす。ああ、人体を溶かすことは無いんで安心したまへ。ま、証拠隠滅ってやつですな。そのプレートを纏った装備は、拙者にとって都合がよろしくないゆえ」

シコシコがクレマンティーヌの防具を溶かした理由は、スパルタカスに彼女を組合につき出させないためだった。彼女がああ装備を纏ったままだったなら、彼はその装備を証拠に、彼女を冒険者殺しの犯人として連行するだろう。そして、それをきっかけに冒険者組合との交流を図るだろう。

スパルタカスは一人の女の命よりも、大勢の人間や組織とのコネ作りを優先する。シコシコとは、真逆のタイプの男だ。だから、彼にとってはああの装備は都合が悪かった。

「でゆふ。では、下の方も溶かしましょうぞ」

「ま、待ってー! じ、自分で! 自分で脱ぐからー!」

新しい壺を取り出したシコシコを見て、クレマンティーヌは顔を引き攣らせて言った。彼女は腰鎧諸共、下着と武器まで溶かされてしまうことを嫌がったのだ。

なにやらあの壺の酸は特殊らしい。人の装備品だけを溶かす性質。ふざけた特性の酸だと思った。

クレマンティーヌはシコシコたちに背を向けると、腰鎧を脱いだ。背中越しに感じる男たちの視線が、彼女は不快でしようがなかった。

「おほー……」

色白で、シミ一つないクレマンティーヌの背中に、シコシコが感動の声を零した。

「……これでいいでしょ」

胸を隠して、正面を向く。クレマンティーヌは羞恥心で顔が真っ赤だった。

「黒パンでござんすか……おうふ」

僅かに頬を上気させ、股間を覆う布をこそごとと漁り始めるシコシコ。

クレマンティーヌは、これからされるだろう行為に鳥肌が立った。彼女は自分を掻き抱くようにして、嫌悪感を表した。

「さあ、これを身に着けるでやんす」

だが幸いに、クレマンティーヌの恐れた事態にはならなかった。

シコシコは腰巻から女性物のような防具とスカート、ロンググロブを取り出すと、それを彼女の足元へと投げた。それを着ろということらしい。

彼女はその装備の、一目でわかる質の高さに目を瞠った。

「なんで……う？」

同時に、クレマンティーヌは敵からの施しに戸惑った。

「下着一丁で、王の前に行くわけにはいかないでやんすからね。あつ。

その装備は拙者には必要ないんで、プレゼント！ フォー、ユー！」

なぜこの変態は、国が国宝に指定しそうなほどの女性用防具を持っていたのだろうか。わけがわからないが、変態だからだろうか。いや、今はそんなことはどうでもいいか——。

クレマンティーヌはその女性用防具——砂の魔術師シリーズ（フードを除く）を手に取ると、再びシコシコたちに背を向けた。

まずは上衣を身に付け、次にスカートを履く。ロンググロブを手に通し、振り向く。

『おお〜!!』

湧き上がる男たちの感嘆の声。

クレマンティーヌは顔を顰めると、下を向いた。

次はどんな問が飛んでくるのだろうか？ 一体何をされるのだろうか？ 全く予想ができなかった。

胃がきりきりと痛む。

彼女がストレスに押し潰され、げんなりし始めた時だった。

「うつせえつすよ、あんたら！ 寝れないじゃないっすか！」

ばんっ！ と背後の扉が開け放たれた。

びくつと肩を震わせたクレマンティーヌが振り返ると、そこには眉間に皺を寄せた美少女がいた。



3人の戦いは三日三晩も続いていた。

周囲の木々は戦いの余波でなぎ倒され、所々、地面も抉れている。決着は着かず、誰かの勝利で終わったわけではない。

「ヴォアア……」

銀色の甲冑を着たプレイヤー——アルトリウスは左手に持った“栄華の大剣”を引き摺りながら、小高い丘の周囲を徘徊している。

彼は自分が何者なのか、なぜここにいるのかも忘れてしまった。死に過ぎて亡者化が進み、記憶と理性を失ったのだ。

彼と戦っていたオーンスタインと、彼らの戦いに巻き込まれたユースケも同様だった。彼とは逆回りで丘を徘徊している。

ばったり出会えば最後の一人になるまで殺し合い、死んだ場合は丘の頂で復活する。そして、丘を少し下って、死ぬ前と同じルートを徘徊する。そうしてまた会ったら、間髪を入れずに殺し合う。

彼らはこんなことを一日中繰り返し返している。

「どうしますか、ニグン隊長？」

「……各員、まだ動くな。奴らに気付かれたら、その時点で全滅は必至だと思え」

カルネ村で敗走したニグンと陽光聖典の面々は、一端トブの大森林方面へと逃れた後、法国へと帰るため、カルネ村の南方にあるこの小高い丘の麓まで来ていた。

3体の亡者に出くわしてしまったのは、ただ単に運が悪かっただけ

だった。剣戟の響きを怪しく思い、その丘の上を覗いた時、これらに遭遇してしまったのだ。

ニグンはこの亡者たちの戦いに度肝を抜かれた。遙かに人間を超越している身のこなしに、木々をなぎ倒すほどの衝撃波を生み出す膂力。騎馬はそれに巻き込まれて死んでしまった。かくいうニグンらも、落馬による怪我を負っており、満足に走ることができない状態にあった。

幸運な事に、亡者側はまだニグンたちには気付いていない。隙を見て、ここを離脱する。それが現在のニグンらの、高度な任務だった。

「ヴァ……オオオオアアア……」

左手側から、槍を持った騎士がやってきた。どういうわけか、この騎士らはお互いに顔を合わせた途端に、殺し合いを始める。その隙にここを離れる。ニグンはそう考えた。

丘の中腹辺りで、騎士たちが顔を合わせた。2体とも、武器を持った手に力が込められる。どうやら、お互いを認識したようだった。

亡者と化したアルトリウスが、同じく亡者となっているオーンスタインへと飛びかかった。

オーンスタインが避けたことによって、アルトリウスの大剣は地面へと突き刺さる。地が爆ぜた。

地面を抉った大剣、その切っ先を地面から抜くと、アルトリウスはそれを肩に担いだ。そして再び行われる跳躍。

「ヴォアアアアア!!」

「オオオオアアア!!」

雄叫びを上げながら殺し合う亡者たち。

斬撃によって発生した衝撃波が、ニグンの頬を打った。

「くっ！ 化け物どもめっ……」

衝撃波と共に飛んでくる土に、ニグンは片手で顔を覆った。

「た、隊長！」

「ええい、狼狽えるなっ」

軽い恐慌状態になった隊員を叱責する。ここで奴らに気付かれ、襲われでもしたら、せつかく生き残ったことが無駄となってしまう。そ

れに、ニグンは死ぬつもりなど毛頭ない。

彼らが戦いを繰り広げる2体に注意を向けていると、突如後ろの茂みが揺れ、小さくない音が立った。

「っ！ だ、誰だっ？」

驚愕したニグンが振り返ると、陽光聖典らの隊員の目もそちらへと向く。

「ようやく見つけましたよ、ニグン隊長」

捨てる神あれば拾う神あり。

茂みから現れたのは、白い鎧をまとった黒髪の少年と、彼率いる漆黒聖典の面々だった。

「あ、貴方は……」

ニグンは漆黒聖典の隊長がここにいることに疑問を浮かべたが、同時に、安堵感が心の内から湧いてくるのを実感した。

「ニグン隊長、貴方は隊員たちと共に法国へと帰還してください。護衛として、セドランらを付けます」

「護衛を……？ すまない、感謝する」

脇腹を押さえるニグンを見て、隊長は眉を寄せた。おそらく、ニグンは歩くのすら困難な状態なのだろう。

厳しい撤退戦になりそうだ――。

隊長は丘の上で戦っている者たち、一直線にこちらに向かってくる亡者を見据え、槍を構えた。



「いやあ……。災難だったつすねえ、クレマンティーヌさん。平気つすか？」

「へ、平気………だけど………」

自分の顔を覗き込んでくる薄着の美少女に、クレマンティーヌは息を飲んだ。

あの後。一室に男3に女1という状況、しかも女性の方は辛そうな表情をしていることから、ヨロイは勘違いしてキレた。シコシコの股間を蹴り上げてダウンさせると、彼女はクレマンティーヌの手を引いて、隣の借り部屋へと逃げて来た。そして、クラージェにそのことを報告し、彼らを制裁してくるよう頼んだ。

ヨロイは椅子にどさつと腰掛けると、クレマンティーヌも座るように促した。

クレマンティーヌは目の前の少女を警戒しながら座った。この少女も「ダクソプレイヤー」なのだろう。自分が手も足も出なかったシコシコを、一発でダウンさせてしまったのだ。

「そういうえば、クレマンティーヌさんは見かけなかった顔っすけど……ダクソプレイヤーじゃないっすよね？」

ヨロイの質問に、クレマンティーヌは首を縦に振った。

「ふうん。ダクソプレイヤーを知ってるんすね。まあ、どうせあの変態さんが口走ったんだろうけど……」

ヨロイの予想は外れていたが、クレマンティーヌはわざわざそれを正そうとは思わなかった。

ヨロイはテーブルの上に置かれたティーカップに、ポットから紅茶を注ぐと、それを差し出した。

「どうぞ」

「……どうも」

「お説教が終わり次第、クラージェさんも帰ってくるっすから」

クラージェという名前にクレマンティーヌは反応した。

この部屋へと連れてこられる直前にいた、あの黒髪の美女がそうなのだろう。たしか、彼女が「ダクソプレイヤーの王」なのだったか……。

射抜くような伶俐な目つきに、堂々とした佇まいと風格。言われずとも、その存在自体が上位者であることが窺えた。

目の前の少女を見る。ティーカップに口を付けるその姿は、可憐でいなながら隙がない。クレマンティーヌには、彼女が歪な存在に思えた。

「飲んでどーぞ」

ヨロイの言葉に、はつとする。いつの間にか俯いていたらしい。クレマンティーヌは顔を上げると、ティーカップに口を付けた。渋すぎる。これ以上飲むのは遠慮しておこうと思った。

ヨロイがクレマンティーヌを連れ去った後、クラージェはシコシコから事情を説明されていた。

クレマンティーヌが猟奇殺人犯だということを聞いて、彼女は身を乗り出した。

「ちよつと待つて下さい。なら、彼女と二人きりのヨロイさん危ないですよね？」

ヨロイ同様に、クラージェは今は薄着だ。身を乗り出した際の彼女の胸元を見て、シコシコは、おうふつ、と喜色ばんだ声を上げた。

「ま、まあ……マリーたんなら大丈夫でしょうぞ。クレマンティーヌたん、ぶつちやけ弱いんで」

この世界でいうならば、クレマンティーヌは最強の戦士なのだが、変態にとつては欠伸が出るほどの雑魚だった。それに、ヨロイは防具を身に付けていないとはいえ、プレイヤースキルだけでいうならば、ドラングレイグ王国騎士団内においては、彼の見立てでは上から2番目の実力だ。負けるわけがない。

「はあ……、弱いんですか。よくそれで、なんて言いましたっけ？ ユースケさんでしたっけ？ 彼を倒せましたね」

「弱いとはいっても、プレイヤースキルが高くてレベルもカンストしてるシコシコさん基準ですから……。彼から聞いた限りで言えば、こちらのプレイヤーからしてみれば、十分驚異だとは思いますがね」  
ウザベルが苦笑して言った。実際、彼の言っている通りだろう。

一瞬で距離を詰めて刺突攻撃を行ってきたり、確定反撃として不落要塞によるパリイを行ってくるクレマンティーヌは、並みのプレイヤーからすれば、ボス以上の相手だったことだろう。基本的に回避能力の高いクレマンティーヌは、待ちゲーをして刺突攻撃時にパリイをしない限り、プレイヤーが有利をとることは不可能だ。



「そういえば、ユースケさんはどうになりましたか？ こちらの街へ帰ってきましたか？」

「我々みたいに、エ・ランテル近郊に篝火を作っていたというわけではなさそうですね」

「そうですね。まあ、ユースケさんの件に関しては、明日の騎士団定例会議で決定することとしましょう」

騎士団定例会議とは——クラージェを議長とした三日に一度行われる、今後の方針を決定・調整する会議である。

彼女は、

「クレマンティーヌはこちらでしっかりと監視しておきますので。……では、明日」

と言つて、踵を返してドアノブに手をかけた。

「おふっ。ちよつとタンマですぞ、クラージェたん」

シコシコに呼び止められ、振り返る。

クラージェが不審に思い、首を傾げると、彼は手のひらに指輪を載せ、それをこちらへと差し出してきた。

「退魔プラス1に鉄加護プラス2、竜印に古い獅子……これらをなぜ私に？」

「クレマンティーヌたんに渡して欲しいですぞ。ぐふふ……」（うっ、き、気色悪い！）

賤しい笑みを浮かべたシコシコに、クラージェは顔を引き攣らせた。

「わ、わかりました。渡しておきます……。——ああ、言い忘れてました。ウザベルさんとハゲピカさん。貴方がたも明日の定例会議への出席、お願いしますね。場所はこの宿で借りた一階のホールの奥、大部屋になりますので」

クラージェの要請に、二人は頷いて了承した。

部屋を後にし、廊下へ出た後、彼女は脱力した。

めんどくさい事押し付けてきやがって、あのド変態め——。

明日の騎士団定例会議でクラージェは、クレマンティーヌをシコシコの監視管理下に置く、という提案を出すようにと彼に頼まれているのだ。

王として、できる限り配下の頼みは聞いてやらねばなるまい。それにしても、王というのはやたらと気を遣うし、疲れるな——。彼女は隣室へ入ると、勢いよくベッドへと腰掛けた。

早朝。

黄金の輝き亭一階の最奥、そこにある一室。

豪華絢爛な部屋の中心には、議題の中心であるクレマンティーンがおり、17人のダクソプレイヤーが彼女を囲っていた。

三日に一度行われる騎士団定例会議。本日のその会議内容は『クレマンティーンの入団の可否』と『クレマンティーンをシコシコの部下に配置することの賛否』『役職の通達』だった。

会議が始まって早々、意見は真つ二つに割れた。まず、賛成派の筆頭として、この議題をクララゲへと持ちかけたシコシコがいる。議長クララゲ、ヨロイ、ウザベル(頼まれて仕方なく)らも賛成派に回っており、人数は9人と過半数を超えている。

一方、反対派は副議長のスパルタカスやワイを筆頭とした、慎重派のプレイヤーが多かった。それは当然なことだった。なにせ、クララゲは彼らにクレマンティーンについて、彼女が元漆黒聖典第九席次だったことやこの世界の住人ということ以外は、何も説明していないのだ。スパルタカスがクララゲに、議題の彼女がどのような人物なのかと訊かれた際、彼女は一瞬口を噤んだ。そして、その後『王は王に頭を垂れる人間はすべて赦す。過去は問わぬ』などと、答えになつていない答えを返してきた。意味がわからなかった。

それに彼らにとって、クレマンティーンは怪し過ぎるのだ。この世界の住人でありながら、ダクソ2の世界の武器防具を装備しており、さらにあの肉食獣を想わせる寧猛な笑みだ。

スパルタカスは、思考がぶっ飛んでいるシコシコは置いといて、クララゲとヨロイはその女に騙されているのではないかと心配していた。彼はこの騎士団において、自分が脳ブレインの役割を担っていると自負している。ゆえに冷静に、騎士団の利になる判断をしなければいけない。もしクララゲらが騙されているのだとしたら、近いうちにどういう形であれ、損害が出ることだろう。

残念ながら、最初の採決は9対8でクレマンティーンの入団が可決

されてしまった。

まずいことになった、とスパルタカスは口惜しさに奥歯を強く噛んだ。

向かい側に見えるシコシコが嬉々とした雄叫びを上げているが、スパルタカスは舌打ちして見なかったことにした。

会議は次の内容へと進んだ。『クレマンティーンをシコシコの部下に配置すること』これに関しては、スパルタカスは反対する気がなかった。なぜシコシコなのが全く理解できないが、要注意人物を最強の変態に押し付けられるのだ。多少は安全性が出たと考えられるだろう。

スパルタカスはここでさらに、偶然とはいえ安全性を高めるためとなった、昨日からクラীগと決めていた情報網を強化するための意見を出した。

「シコシコさんは今日より、エ・ランテルを拠点とし、ここで活動をしていただきたい」

「な、なんですと!?!」

シコシコを騎士団の常駐戦力から抜くのは手痛い損失だが、元々、ウザベルらと定期的な情報交換をするためには、媒介役としてこちら側のプレイヤーを一人はエ・ランテルに滞在させないといけなかった。シコシコに矢面が立ったのは、仮に誰かに襲われたとしても殺されることはないだろう、という理由からだ。

先日、エ・ランテルの共同墓地手前に設置した篝火の検証の結果、カルネ村の篝火へとワープすることができた。つまり、王都リ・エステイーゼに篝火を突き立てて誰か一人を連絡役にし、媒介役にこちらの情報を伝えてあちらの情報を受け取るだけで、簡単に情報交換ができるというわけだ。

スパルタカスはこの流れを全員に説明し、賛成を得たが、シコシコだけが不服そうだった。

「せ、拙者のハーレム計画が……クラীগたん、マリーたん……おおっつんっ——」

馬鹿は放っておくに限る。スパルタカスはがつくりと項垂れた変

態を無視し、最後の議題へと会議を進めた。

これに関しては、会議というよりも通達だ。

前もって、あらかじめクラージェには各員の役職名・役割を振るよう  
に一任してある。今日はその発表を行うに過ぎない。

「それでは皆、まずは各員の役職名・役割を伝える」

凜とした、すーっと耳に入り込んでくるような声が響いた。

クラージェは手に持った羊皮紙に視線を落とすと、そこに書かれてい  
ることを読み上げた。

「ヨロイ、ブリメーラ・カバリエロ 第一の騎士」——役割は王の護衛と代理だ。ワイ、ド

ラングレイグ王国騎士団団長」——役割は騎士団の指揮、統括」

「ちよっー」

スパルタカスはクラージェの発表に度肝を抜かれた。彼はてつきり、  
自分が騎士団長になるものばかり思っていたのだ。

予期せぬ結果に、スパルタカスは瞠目した。

驚いたが反発するのはまだ早い。もしかしたら、軍師とかかかもしれ  
ない。

期待半分不安半分といった様子で、彼はクラージェに問いかけた。

「お、王よ、待って下さい！ 私の役職は……？」

「なんだ、スパルタカスよ。自分の番が待ち切れなかったのか？ 早  
漏め」

周りのプレイヤーから、笑い声が上がった。

スパルタカスは、クラージェに対して罵りの言葉を出さなかった自分  
を褒めてやりたい気分になった。

腹が立ったが、それを必死に抑え込んで、押し黙る。

「スパルタカス、ドラングレイグ王国騎士団参謀長」——役割は王  
への助言、戦時下での作戦立案だ」

発表を聞き、溜飲を下げる。

役割は今までと大して変わらなく、団長ほどではないが、騎士団の  
中での地位は高そうだ。

焦った自分が馬鹿みたいだ。スパルタカスは恥をかいだことに額  
を抑えた。

「シコシコ、〃特務隊長〃——役割はこの世界の情報収集とその報告。ウザベル、〃特別騎士団員〃——役割はシコシコへの情報提供だ。えーっと、次は——」

クラীগが次々にプレイヤーたちの役職名と役割を述べていく。彼女は用済みになった羊皮紙を畳むと、クレマンティーヌへと顔を向けた。

クレマンティーヌはクラীগから、今回の役職の通達は、自分が加わったことによる再編によるもの、と聞かされていた。

「クレマンティーヌ、〃特務隊長補佐〃——役割はシコシコのサポートだ。これで全員の役職と役割は伝えたな？」

クレマンティーヌはこの瞬間、歓喜と恐怖が緋い交ぜになった歪んだ感情に心を支配されていた。この化け物集団の仲間入りを果たしたことで、彼女は法国の追跡に頭を抱えなくて済むと思った。

あの変態の部下ということは、自分が常に彼の傍にいるということを示している。変態の恐るべき實力を知れば、法国は自分にはもう手出しはできまい。気持ち悪い性格を除けば、こちらに危害を加えてくるといふこともしてこなかった事も考えると、これは便利な後ろ盾を手に入れた。

自然と、その口が裂けるような笑みを浮かべていく。

不気味な笑みを浮かべているクレマンティーヌに、ワイはスリット  
の奥の目を鋭く細めた。

この女は危険だ——。



会議が終わった後、プレイヤーの面々は方々に散っていった。

クラীগとヨロイをハーレムへと加えるという野望は無残にも砕け散ったが、クレマンティーヌは残っている。シコシコは最後の砦である彼女を伴って、メインダイニングで朝食をとっていた。

この場に似つかわしくもない、二人の露出過多な恰好に、周りの客が何やらひそひそ話を始めている。だが、自分たちが何かを噂されているにもかかわらず、二人は全く気にとめていなかった。

皿の上に載ったローストされた肉をフォークで刺し、それを口に運ぶ。

「んー。美味しいねー」

自然と口を衝いて出る感想。さすがはエ・ランテルの最高級宿屋『黄金の輝き亭』だ。このような上質な肉を食べたのはいつ振りだろうか。

この宿の高級料理を堪能しながら、クレマンティーヌは昨日と打って変った態度でシコシコへと話しかけた。

「いやー、それにしても結構金あんのね、あんたら。異世界人だから、この世界の貨幣なんて持ってなかったでしょーに」

たった半日程度の時間で、女好きなシコシコが自分には危害を決してくわえないということ、クレマンティーヌは理解していた。だから安心して、彼女は平素の自分を出していた。

英雄色を好むとは本当のことだったんだー、などと思う。こんなのが英雄かと言われれば、否定したくなるが。

「でゅふ。高く売れそうな鉱石類を売り払ったんですぞ」

ころつと態度を変えたクレマンティーヌだが、彼女の本性を知っているシコシコは全く気にしていなかった。

「へー、どんな鉱石を売ったの?」

「見たいでござるか? 見たいでござるか? でゅふふ」

「うん、お願い。見せてくれる?」

「ぶふふ。ほいっ」

テーブルの上に青く煌く石——蒼光石が置かれた。一目見ただけで、特殊な鉱石だということが分かる。今まで一度も見たことがない類の石だった。

「ふーん」

クレマンティーヌは手にとって見たい気持ちに駆られたが、股間を覆う布から取り出されたそれを触る気にはならなかった。

テーブルに置かれたそれを、見る角度を変えて眺める。

「欲しいのなら、あげるでやんすよ」

「え……。そ、そーねー。せつかくだから貰っておくわ。ありがとー」  
汚い物をつまみあげるようにして、蒼光石を手取る。そして、即座に腰に付けたポーチ状の袋へと突っ込む。

手拭きで石を掴んだ指を「ごしごし」と拭く。

クレマンティーヌは手拭きを置くと、口端をつり上げた。

「そんでさー、聞きたいんだけどシコちゃん」

「んん？ 何でござんしょ」

「情報収集だったって、何するの？ 私、あんたたちがなんの情報を探しているのかとか、何を目的として行動しているのか、とか全く知らないしー」

「うーむ……。別に情報なら何でもいいですぞ。それと、目的は個人によってまちまちですぞ」

「そーなの？」

「そーなんす」

「へー。じゃあさ、シコちゃんの目的は何なのかなー？ 教えてくれない？ ほら、私って今はもうあんたの部下でしょー。だからさー、そういうのって把握しておいた方がいいよねー」

この化け物の行動原理を把握しておくことは、自身がこれから生きていく上で必ず有利に働く。特に、敵の多いクレマンティーヌにとつてはなおさらだった。

「ぶふふ……。拙者の目的でござるか。それはずばり！ 拙者のための拙者だけのハーレムを作ることござんす！」

「あ、そー」

予想はしていたが、あまりにもわかりやすい答えに、クレマンティーヌは何処か毒気を抜かれた気分になった。

フォークでマッシュポテトを掬い、口に運ぶ。これも非常に美味だった。

シコシコの野望を聞いて白けてしまった彼女は、彼には目もくれず食事に集中することにした。



ローストされた肉の最後の一枚を平らげた時だった。

「シコシコさん、少しよろしいか？」

背後から声がかかる。クレマンティーヌが振り返ると、その目に赤の目立つ軽鎧を着た戦士が映った。

たしか、騎士団の参謀長だったか。ダクソプレイヤーたちは一人残らず、要警戒人物だ。そう思ったクレマンティーヌは、スパルタカスを注視した。

何となくではあるが、このレベルの男ならば勝てそうだ、という答えが彼女の中で出た。彼女はスパルタカスを獲物の一体として、脳内に刻みつけた。

「何でやんすか？」

シコシコの声色に少し怒気が籠っていた。理由は、朝の定例会議でスパルタカスが彼の『ハーレム計画』を壊したからだろう。

しかし、スパルタカスはそんな彼の心情などお構いなしに、参謀長としての指令を出した。

「ウザベルさんら曰く、冒険者というのは何かと情報が入ってきやすい職らしくてね。そこで、シコシコさんらには、このエ・ランテルでは冒険者として活動をしてもらいたいですよ」

「冒険者でやんすか？」

「ええ。ウザベルさんらには前もって伝えてありますので、登録などの手順は彼らから聞いてください」

「ふくん。拙者が冒険者になるということは、クレマンティーヌたんもでやんすか？」

「もちろんです」

クレマンティーヌを一瞥し、頷く。スパルタカスは「では、頼みましたよ」とだけ言っつてこの場を後にした。

冒険者殺しをしてきた自分が冒険者となるのか。とんでもない皮肉だ。

自分よりも弱い戦士とはいえ、参謀長の立場はこちらよりも上。クレマンティーヌは、スパルタカスの命令を渋々受け入れることとなった。

エ・ランテルにある共同墓地、そこにある霊廟の地下深く。

ズーラーノーンの十二高弟の一人、カジット・デイル・バダンテールはいつこうに帰ってこない己の計画の協力者に苛々を募らせた。

一本も毛の生えていない眉を寄せ、広間をうろうろと落ち着きなく歩く。

死の宝珠により負の力を集めるための、都市壊滅規模の魔法儀式“死の螺旋”。エ・ランテルを死の都市へと変えるための儀式だが、これをすぐ行うには“叡者の額冠”の力が必要不可欠だ。だが“叡者の額冠”は装備した者を、ただの魔法を吐き出すだけのアイテムへと変えてしまうデメリットがあるため、カジットは適合者ではないためにこれを扱うことはできない。

この街にいる、あらゆるアイテムを扱えるという、適合者となれる少年を攫ってくる。協力者の女、クレマンティーヌが今夜行う予定となっているはずなのだが――。

(いったいどこを遊び歩いておるのだ！)

予定では今夜が彼の計画の実行日だ。

昼までには、その少年を攫う手筈を打ち合わせしておきたかった。だが、クレマンティーヌは昨夜『ちよつと散歩してくるー』と言って出て行ったきり。

(もしかや、協力すると言っておきながら雲隠れしたわけではあるまいな?)

これ以上あのような性格破綻者を当てにしているのは、計画が頓挫してしまう。どの道、あの女がいなくても部下たちと共に事を起こすつもりではいた。

(仕方あるまい。誘拐は後日に行うこととするか)

適合者の少年、ンフィーレア・バレアレは有名な薬師の孫にあたる。彼だけなら攫うのは容易なのだが、祖母の薬師――リイジー・バレアレが厄介なのだ。彼女は第三位階魔法の使い手でお且つ顔の幅が

きく。孫が行方不明となれば、彼女はすぐに冒険者を雇ってその散策に出るだろう。そして組合はそれを、異常事態が起きていると感知して警戒を強めることだろう。『死の螺旋』を発動まで秘匿しておきたい彼にとつては、非常にリスクなことだった。

カジットはフードを目深にかけた部下を呼びつけると、リスクを避けるためにワーカーを雇ってリイジー・バレアレの動向を監視するよう指示を出した。



きりがない――。

丘の登頂から駆け降りてくる騎士2体と戦士を見て、漆黑聖典隊長は大きく息を吐いた。漆黑聖典はこれらを既に3回ずつは殺している。なのに奴らは死んだ傍から霧散し、そして間髪入れずに丘の上から再び姿を現す。

おそらく、また殺してもあの丘の上で復活されるのだろう。

正直、己も隊員も限界だった。隣に立つ前衛を引き受けているセドランは、無数の切り傷をその身に受けており、疲弊も相まって痛々しかった。

プリンシパリティ・オブザベイシヨン  
「監視の権天使！」

背後でニグンが叫んだ。彼は怪我による痛みにも表情を歪めながらも、その瞳に強い意志を秘めていた。

召喚された天使が騎士に向かっていく。攻撃範囲に入った途端、天使がメイスを振り下ろす。

しかし――

絶叫のような雄叫びを上げた騎士、その放った大剣による一撃で天使は呆気なく消失してしまう。

「ぼ、馬鹿なっ!!」

驚愕するニグン。彼の行った行為は結果として、騎士からのヘイト

を集めただけであり、漆黑聖典にとっては余計な事をしただけとなった。

大剣を持った騎士がニグンへと一直線に向かう。両者間にセドランが割って入るが、騎士の勢いを弱めるのが精々で、彼は後方へと大きく突き飛ばされてしまう。

護衛対象であるニグンに騎士が迫る。

ニグンが絶望に表情を凍りつかせ、一步下がった。

絶体絶命の状況だったが、この時のニグンは運が良かった。後ろへと一步下がった際、地面に描かれていた文字を踏ん付けたのだ。

『不死殺しのMark この霊体を召喚しますか?』

ニグンの脳内にこのような言葉が流れた。恐怖で混乱していた彼は、あと先など考えられるような状態ではなかった。神に縋る思いで、彼はこの質問にイエスと答えた。

彼の足元から光が溢れる。

驚き、そこから慌てて退くと、全身が白く輝く人型が出現した。

全員が突然の事態に対応できずに固まる。

静寂の中、いち早く動き出したのは槍を持った騎士だった。白い霊体に向かって突進し、槍を突き出す。白い霊体はその突きを転がって避けると、懐からぼろぼろとなった古びた剣を取り出した。

そんなもので戦うつもりなのか――?

得体の知れない白い存在。それのとった行動を隊長は不審に思った。

白い霊体に再び騎士が襲いかかる。だが今度は、白い霊体は避けるそぶりを見せなかった。

突きが繰り返される。白い霊体はそれを容易く左手に持った白い盾で弾くと、騎士の左胸を右手に持ったぼろぼろの剣で貫いた。

その瞬間――騎士の全身が激しく燃え上がった。

「グオアアアアアア!!」

雄叫びを上げ、もがき苦しむ。

騎士は両膝を折って倒れると、そのまま灰となって消滅した。

「無駄だ! そいつは殺してもまた復活する!」

隊長が霊体に向かって叫んだ。

霊体は彼に振り向くと、片手を左右に振って彼の言うことを否定した。

「なに——？」

二人のやり取りを見ていた漆黒聖典と陽光聖典の隊員らが丘の頂を見る。

一向に騎士が復活してこない。そのことがいったい何を意味するのか、それを理解した隊長は吃驚した。

「まさか、本当に死んだのか……？」

白い霊体は隊長の言葉に頷くと、死んだ騎士のいた場所から3本のぼろぼろの剣を回収した。

そしてそのうちの1本を隊長に渡し、自身の胸を指して、ぼろぼろの剣を自分の胸に向けた。

「これを使えば殺せるということか？」

隊長の言葉に白い霊体は首を縦に振った。

「なるほど。だがしかし……なぜお前はこのことを知っている？ それにお前は何者だ？」

白い霊体はこちらへと向かってきた不死者の戦士を指し、次に自分を指した。

「ちっ！」

隊長はその戦士の振り下ろした剣を槍の柄で受け止めると、左手にぼろぼろの剣を持ち、戦士の左胸へと突き刺した。

先ほどの騎士と同様、全身が火に包まれた戦士は獣のような叫び声を上げて死滅した。

白い霊体はまたもや戦士の死んだ跡からぼろぼろの剣を3本回収すると、そのうちの1本を隊長へと渡した。

「お前とこの者たちは同じ存在。そう言いたいのか？」

隊長が問うと、白い霊体は頷いた。

白い霊体——マークがダクソプレイヤーを殺す方法を発見したのは単なる偶然だった。

一緒に旅をしていたプレイヤーが欲に目が眩み、こちらを裏切つて

殺しにかかってきた時だった。彼は咄嗟にその場に突き立ててあった篝火から剣を抜き、それをそいつへ突き刺した。するとこちらを裏切ったプレイヤーはもがき苦しみ、先ほどの戦士や騎士同様に復活できずに完全に消滅した、というわけだ。

「なぜ自分と同じ存在を殺す？」

しかし隊長の問いに白い霊体は答ええない。彼は現在言葉を話すことができない状態のため、仕方ない事なのだが、隊長はそれを知らない。

「訊いている。答えてはくれないのか？」

「……」

ジェスチャーのない無言が、隊長の問いに対する答えだった。

白い霊体は隊長から顔を逸らすと、最後の一体の騎士へと目をやった。



冒険者ランクを手っ取り早く上げたいのなら、強力なモンスターを倒して名声を稼げばいい。

ウザベルからシコシコはそう聞いた。ゆえに彼は今、相棒ということになっているクレマンティーンを伴って、エ・ランテル西南の山間部へとやってきていた。

冒険者らから情報収集をした結果、エ・ランテル近郊で最も強いモンスターが出現するのはこの山脈らしい。アダマントイト級冒険者が数人がかりでないと倒せないといわれている竜、それがここにいる。

「ねーねー、シコちゃん」

「ん？ 何でござんしょ？」

「ダクソプレイヤーって、武技使えないのにどうしてそんなに戦えるの？」

「さあ？ 何でじゃろうのおー」

墓地でのシコシコとの戦い、そしてユースケから得た情報からも、クレマンティーンは彼らが強い理由を窺い知ることができなかった。強さには必ず才能や戦闘の経験というものが伴ってくる。ユースケは、前者に関しては武技すら使えない才能の欠片もない雑魚であり、後者もほとんどないずぶのド素人だった。それにもかかわらず、戦闘能力はアダマンタイト級に近い強さがあった。

要するに、ダクソプレイヤーは才能や経験と戦闘能力が比例していないのだ。

昨夜褥で聞いた際も、シコシコが実際に人と戦ったのはクレマンティーンが初めてだと語っていた。なのに百戦錬磨の自分が、まるで赤子の手を捻るかのように負かされてしまった。

どうしても納得がいかない。

クレマンティーンはシコシコらダクソプレイヤーに嫉妬していた。

「あのさー、誤魔化さないで真剣に答えて欲しいんだよねー」

表情自体は笑っているが、目は笑っていない。

絶対に何か秘密があるはず。そうでないと、あまりの理不尽さに発狂してしまいそうだ。

クレマンティーンはイライラで引くつる口端を押さえた。

「あ！ もしかしたらレベルが関係あるかもしれないですぞ」

「レベル？ 何それ」

あまり聞き慣れない単語だ。

「レベルというのは、簡単に言うとな強さの指標みたいなものですな。」

「ふーん。それで、シコちゃんレベルはどのくらいなの？」

「最大レベルの838ですぞ」

「はあ——？」

対人戦を殆どやったことない奴が、強さの指標で最大値——信じるなら最強ということになる。

墓地での戦いを思い出してみれば、最強といわれてもおかしくはない。しかし、それにしても経験がなさ過ぎる。

やっぱり嘘ついてんだろこいつ——。

クレマンティーヌはじろりとシコシコを睨みつけた。

「おうふ」

一般人だったら竦み上がるような視線だが、シコシコは喜色ばんだ笑みを浮かべている。

「ったく、変態がよお」

ちつと小さく舌打ちする。

「それで、そのレベルっていうのに私を当てはめるとどれくらい？」

「知らん。他人のレベルは見れないでやんす」

「……」

シコシコから却ってきた答えに、小さくため息をつく。

とつとと竜を殺して、エ・ランテルへ戻ったら憂さ晴らしに誰か殺そう。

不機嫌を貼り付けていると、突如周囲が真っ暗になった。

二人は示し合わせたかのように、共にぼつと上空を見た。

「う、嘘——」

そこには空を覆いそうなほどの土色の巨竜が羽ばたいていた。浮いていなければ、まるで山と見紛いそうなほどの大きさだ。

こんな怪物、人がどうこうできるものじゃない。おそらく、同じ戦士であるシコシコでも相手をするのは無理だろう。クレマンティーヌは先ほどと打って変わって、顔を青白くさせた。

「おほー。ビッグなりい」

「な。おいてめえ、不死だからって余裕こいてんじえねえぞ！」

シコシコの気の抜けるような声に、クレマンティーヌはそれが死なないことからくる余裕だと思った。しかし、実際はそうではなかった。

「およう？ 拙者は不死なんどすか？ うほほー、それは良い事を聞いたでやんす」

「え？ 何を言って……」

お互い、認識に齟齬があるらしい。クレマンティーヌは些か困惑したが、それは瑣末事だ。

今はこの超弩級の竜からどうにかして逃げる必要がある。疾風走



破や流水加速など、武技を重ね掛けして逃げる準備を整える。

空を飛ぶ巨竜が二人を敵と見たらしい。二人の上空を旋回するだけだった巨竜が、ぐんぐんとシコシコらに近付いてくる。

「くそ、こっちに気付いた!？」

クレマンティーヌは一気に駆けだし、巨竜の脚の着地点から距離をとった。

しかしながら、どういうわけかシコシコは微動だにしない。クレマンティーヌは、彼が動かないのは、動けないのだと思った。恐怖か、諦めか――。

どんっ！ と大きな地震が起こる。シコシコがいた場所は罅割れ、巨竜の鉤爪が周囲に大きな地割れを引き起こした。

どんなに強い戦士でも、こういつた理不尽そのものである化け物にはかなわないか――。

クレマンティーヌは振り返ることなく、山を駆け下りる。その際再び、地を揺らす轟音が響いた。

その音に驚いたクレマンティーヌが振り返る。すると、そこには目を疑うような光景が広がっていた。

地を割った左足は挽げ、翼は根元から千切れている。そして何よりも、あの巨竜の首から上が無くなっていたことに、クレマンティーヌは目を瞠った。

「おえーっ！ 全身血塗れですぞ！ んんっ、気持ち悪いですぞ！」  
「……」

どうやら人では到底かないそうにない巨竜を、シコシコは素手で倒してしまつたらしい。しかも、その攻撃は巨竜の鱗を易々と貫通し、肉を抉って骨を砕くほどのものようだ。

「うぬううう！ 臭いでやんす！ クレマンティーヌたん、拙者に良い匂いプリーズ!!」

真っ赤に染まつたままこちらへと駆けてくる変態。

クレマンティーヌは愕然としたまま、彼からの熱い抱擁を受け止めることとなった。

華美過ぎない、品性の窺える調度品の並ぶ一室。

椅子に座るクラージェは焼き菓子を頬張った。彼女はティーカップを手に持つと、それを口に傾けた。

彼女は中身が空となったそれを置くと、ゆったりと背凭れに寄り掛かった。

「ふつ、高貴な者が使用人に身を窺す。そういうのもたまにはオツなものだと思わないか？」

クラージェはそう言って黒い燕尾服の袖をひらひらと振った。今の彼女は黒い鎧と白銀の王冠を身に付けた姿ではなかった。

彼女の隣に腰掛けるヨロイは、変にテンションの高い彼女をジト目で見た。

「その台詞何回目っすか……」

小さくため息をつくヨロイもまた、いつもの黒い全身鎧姿ではなかった。今の彼女は黒を基調とした、裾だけが白い——いわゆるゴシック・アンド・ロリータなファッションのドレスを着ている。昨日、クラージェにドレスを買わされて着させられ、スパルタカスによって髪型もポニーテールからツインテールに改造されたため、その姿は元の参考キャラと全くといっていいほど同じものとなっていた。

彼女の元キャラを思い起こし比較してみても遜色ない。ヨロイの可憐さに萌えたために、クラージェはテンションが高いのだ。

「だって、これ以外話題ないし」

今着ている服装の話題など、たいていは一度で済む。そう何度も話し込むようなものでもない。

だがそれを何度もしてしまうほどに、何もすることがなかった。

「というか、なんでコスプレなんすか？」

「いい、いいじゃないか別に。ちゃんと下半身も人の、しかも男装したクラージェとか見てみたいとか思わない？ 超レアだよ!」

「レアだとは思いつすけど。クラージェさんはクラージェじゃないし。所詮。パチモンだし」

「パチモン言うな。ヨロイ君、君の認識は甘いぞ。クラীগは母が事故って化け物になった哀れな娘ってだけだけど、この私は騎士団を纏める偉大なる王なのだ！ すなわち、偽物だけど私の方が凄いいということだ！」

「……あ、そうすか」

「——ノってくれないと会話が弾まないではないか」

「そのテンション、ノリづらいつす」

「なん、だど？ ……ううーん。だめだ、つまらん。まったく、ガゼフのおっさん早く帰って来いつての」

ついに愚痴が零れる。

ドラングレイグ王国騎士団は現状、ガゼフ・ストロノーフ個人に雇われているため、彼の意向に添わなくてはならない。

街で待っていると言われているせいで、いつガゼフが帰ってくるかはわからないこともあって、動きたくても動けない状態になっている。どうしようもないもどかしさが、彼女の中に燻っていた。

「ほんとおつすよ。もう、ちよーて屈」

これに関してはヨロイは同意した。

朝食を済ませてから、お互いかれこれ1時間ほどはこの部屋でこうやっているのだ。

何か暇を潰す良い案は無いものか——。

二人は無い頭を捻って色々と模索するが、名案というものはない。か思い浮かばない。

『——ですって——こわ——ね』

『——え——が——出——たの？』

「ん？」

廊下から女性たちの話し声が聞こえた。だが、途切れ途切れで詳しくは聞こえなかった。

興味をひかれたクラীগは廊下側の扉へと近付くと、そこに耳を当てた。

「昨夜もまた女性が一人攫われたらしいですわ」

「もしかして、またあの？」

「ええ。そうお聞きしましたわ」

「まあ！ これでは恐ろしくて王都へ向かえませんかね」

（人攫い？ ということは野盗とかか？）

これは良い暇つぶしになりそうな話だ。そう思ったクラージェは扉を開け放ち、先ほどの会話をしていたと思われる女性二人に顔を向けた。

華やかなドレスを着ている若い娘であることから、二人は高貴な身分であろうと予測できる。

クラージェは今、執事の様な恰好をしている。彼女は彼女のイメージするそれっぽそうな口調で二人の女性に声をかけた。

「失礼、そこのお美しいお嬢様方」

魅惑的なハスキーボイスが二人の鼓膜を震わせた。声のした方を向けば、そこにいたのは気障ったらしくお辞儀をする男装の麗人がいた。理想的な女性版執事像といった相好をしたクラージェに、女性二人は驚き固まった。

「クラージェさん？」

「あ……」

クラージェの背後から、絵画から飛び出て来たような絶世の美少女が現れた事も相まって、二人は声が出なかつた。黒を基調としたドレスに身を包んだヨロイは、貴族の女性から見ても文句なしの令嬢然とした風情だった。

急に目の前に現れた美女二人に、女性二人は金魚のように口をパクパクと開閉させた。

「いかが、なされましたか？」

クラージェはそう言って、ずいっとその端正な顔を女性たちへと近付けた。

「い、いえっ！」

僅かに頬を赤らめ、片方の女性が両手を胸の前で振った。

「その……あの、わたくしたちに何かご用件が……？」

どうにか心を落ち着けたもう片方の女性が訊いた。

「無礼を承知でお聞きしたいのですが、先ほどの女性が攫われた、とい

う話を詳しくお話し願えないものかと思ひまして」

「会話を聞いていたんですの?」

「聞き耳を立てていたようで申し訳ありません」

「いいえ、構いませんわよ。街道で起きた人攫いのお話でよろしいのよね?」

「はい。お願いします」

クラゲが頷くと、女性は街道に現れるという盗賊団の噂を語った。

現在、クラゲとヨロイの二人はエ・ランテルから馬車を借りて、女性たちから聞いた噂の場所を目指している。そんな道中、黒い全身鎧フルプレートに身を包んだヨロイが隣に視線を向けた。

「勝手に街の外に出てきてよかつたんすか?」

「問題ない。何せ私は王だからな。誰も私の行いを咎められまい?」

「基本的にはそうすけど。でも、実質的なリーダーのスパルタカスさんに愛想つかされたら、ボツチにされるっすよ」

「ばれなきやいいんだよ、ばれなきや!」

「ばれたら?」

「ジャンピング土下座を決めます」

「あ、そうすか」

相変わらず偉そうな態度の割に肝っ玉の小さいクラゲ。ヨロイは彼女を一瞥すると小さくため息をついて視線を前に戻した。

辺りは薄暗くなつてきている。この世界の外での夜が危険だということとは、ガゼフたち王国兵との行軍の際に教えてもらった。この世界には危険な未知なモンスターがわんさかいる、らしい。

野盗退治なんてとつと終えて、すぐエ・ランテルの普通のベッドで寝たいものだ。

ヨロイは恨みがましい視線をクラゲに送る。

「ど、どうかした?」

「なんでもないっすよ」

目を逸らしたため息を再びつく。  
と、その時だった――。

がくん、と車体が大きく揺れて停まった。

次いで外が喧騒に包まれてきた。どうやらこの馬車を数人から十数人の男たちが取り囲んだらしい。

噂の野盗どもだろうか？

ヨロイは大きく息を吸うと、インベントリから煙の剣と大剣を装備欄にセットし、応戦体勢へと入った。

「は？」

一方のクラージェは、思わぬアクシデントに顔を顰めると、車内のドアノブへと手をかけた。

まともな戦いを数日以上もしていないせいか緩みきつている。ヨロイは舌打ちをした。

「クラージェさん、まっ……い！」

軽率な彼女のその行動に、ヨロイは待ったをかけようと手を伸ばした。しかし、その手が届く前に事は起こった。

車内から出たクラージェの胸の中央に、鈍色の刀剣が刺し込まれる。

この馬車の御者であるザックは、この野盗の一味だったのか。

クラージェはこちらを卑しい目つきで見ると、途轍もない蔑みの感情を抱いた。

「へへっ。残念だったな、若いの」

愉悅じみた笑みを浮かべながら、野盗の男はクラージェの胸に突き立った剣を抜き去る。

その際、クラージェの巻いていたサラシが解け、ザックたちは目を大きくした。

「なんだよ、こいつ女だったのかよ。ちっ、もったいねえことしたな……あん？」

剣を胸（心臓）に受けておいて、倒れない。夥しい出血をしているのに平然と立って、こちらを睨みつけている。クラージェのその異様な姿に、野盗の男たちは背筋が冷たくなるのを感じた。

なんだこいつは……？ 何故死なない？

クラゲを攻撃した男は、恐怖に足が鉄の塊のように固く動かなくなっていた。

しかし、彼の恐怖はこれだけでは終わらなかった。

何か巨大なものが崩れるような大きな音に、野盗たちは身を震わせた。その音の方向を見ると、馬車であったものが細切れの廃材へと姿を変えていた。そしてその中央には、屈強な漆黒の戦士が佇んでいる。

スリットから除く青い瞳が、松明の光を反射して怪しく輝いていた。

ザックは驚愕した。確かこの馬車へと乗り込んだのは、剣を胸へと突きつけられたあの執事と、年端もゆかない美しい少女だったはずだ。しかし、粉々になった馬車から顔を除かせたのは全身鎧の戦士。

話が違う。野盗たちは一齐にザックへ顔を向けた。しかし、当のザックも困惑している。その様子から、ザックもまた知りえないことだったのだということを理解した。

「どうした、顔が蒼いぞ？」

声のした方を見れば、黄金の瞳と目が合う。

「ひいっ！」

明らかに、人であれば致命傷であるはずのそれを意に介していない。野盗の男は顔を引きつらせて、後退りした。

クラゲは自身を刺し貫いた剣を注視すると、鼻を鳴らした。

「対人用の剣か、おもしろい。それなら、こちらにもあるぞおおお!!」

絶叫のような怒声を放ち、右手に氷の刺剣を握る。

クラゲは硬直する野盗の男の眉間へそれを突き立てると、それを手放し、今度はレイピアを装備して隣の野盗の胸に風穴を開けた。

動き始めたクラゲに呼応するかのようには、ヨロイも動き始めた。

彼女は煙の特大剣で剣ごと野盗をへし折ると、煙の剣を投擲してもう一人の野盗を仕留めた。目にも止まらぬ速さで投げつけた剣を回収すると、すれ違いざまに野盗の脇腹を切り裂き、続けてもう一人を特大剣で潰殺する。

野盗が全滅するのは一分もかからなかった。

ザックは目の前で起こった信じられない出来事に、腰を抜かして股を濡らした。

「下郎ごときが……よくもこの私を騙してくれたな」

「た、たすけてくれ！ い、い、い、い、命だけはあああ！」

頭を地面に擦り付け、ザックは泣き叫んだ。

その無様な姿に、クラーゲは些か頭が冷えていくのを実感した。彼女は開いた胸元を隠すと、ザックに視線を合わせて屈んだ。

クラーゲの目的は野盗の全滅。その一員を、情報も聞きもせずに死なせてしまうのはもったいなかった。

「ザック。命が惜しいか？」

「は、は、はい！」

「そうか。なら、少しの間だけ生かしておいてやる」

その言葉に、ザックは大きな安堵感を覚えた。少しの間だけ、とはいえ時間があるのなら出し抜く方法を考える時間があるということ。あいつらを当て付けている間に己は逃げ出してしまおう。そう考えた。

「お前の親玉のところへ私たちを連れて行け。連れて行かなかった場合、即殺してやろう」

そのクラーゲの要求にザックは、ついているな、と心の中でほくそ笑んだ。



ザックは恐怖に耐えながら獣道を進んでいた。彼の背後には見目麗しくも残忍な女、それに付き従うように全身鎧フルプレートに身を包んだ小柄な騎士がいた。

足元に細心の注意を払い、仕掛けられた罠を見つけると、彼は道をわずかに逸れた。

「お、お一方。そこにはベアトラップがありますんで……」

気を付けてください。そう言おうとしたが、遅かった。

ベアトラップに挟まれたクラーゲの足首からは血が滲み、ズボンの裾はズタズタにちぎれていた。普通の人間だったら足首も折れていることだろうが、彼女は何も気にせずにそのまま足を踏み出した。

ベアトラップは彼女の足首に食らいついたまま土台ごと地面から引き離され、彼女が左足を動かす度にガシャガシャという音を鳴らした。

「え？」

ザックは我が目を疑った。こんなこと、まともな神経では……、人間ではできない……。しかも何故か、傷を負っているのにそれを感じていないようだった。

まるで痛覚がないかのようじゃないか。

ザックはクラーゲの不気味さに息を飲んだ。

当のクラーゲは自分の左足を見下ろすと、ベアトラップを怪力でぐにやりと変形させて外し、それを茂みへと投げ捨てた。

彼女は自分の穴の開いた胸とズタズタになった左足を見比べ、やはりなと思った。

（この世界はゲームの世界なんじゃないか？ とか言っていた奴がいたが、本当かもしれないな）

何事もなかったように前へと進みながら、彼女は自分の胸へとそつと触れる。掌が真っ赤に濡れるが、構わず傷口へ徐々に手を近づけていく。

そしてぐつと強く胸を押ししてみるが、思った通りまったく痛くない。

い。心臓を貫かれた時も、ちくつとしただけで、死を覚悟するほどかといえ、全くそんなことはなかった。正直、ただただ、視覚的な損傷が派手なだけである。

実際に負うダメージは少なくても、心臓を貫かれれば致死量以上の血が流れるし、おそらく首を撥ねられれば撥ね跳ぶのだろう。だが、HPがゼロにならない限り死ぬことはない。無論、首を撥ねられてどうやって体を動かすかなど知らないし、知りたくもないが。

これはいい情報を得た、とクラージェは真つ赤に染まった右手をぐつと握った。

と、ここで気付く。足音が少ない。

もしや逃げようとしているのか？ クラージェはザックがいる、もしくはなくなっているだろう後方へと目をやった。

「どうした、ザック？ 早く案内せよ」

「へ？」

いつのまにかザックはぼうつとしていた。二人に置き去りにされる形となっていることに気付くと、彼は直ちに彼女らの前へ出て頭を下げた。

「……ところで、お聞きしたいんですが」

「なんだ？」

「その……あのお嬢さん、ヨロイお嬢様はどこへ行ってしまったんですか？」

ばらばらになった馬車にはこの二人以外誰も乗っていなかった。本来はザックらの標的であるヨロイという名の、虚弱な美少女が乗っていたはずなのだ。しかし、彼女は忽然と姿を消した。代わりに乗っていたのは全身鎧フルプレートの騎士だった。

「ここに居るっすけど」

「えっ!？」

兜の奥から聞き覚えのある声が出た。

ありえない、ありえるはずがない。ザックは兜をとって素顔を晒したヨロイを呆然と見た。

「実はあかし、こう見えても力には自信あるんすよねえ」

「か、身体が弱いってどういうのは？」

「嘘に決まってるじゃないっすか。同情を誘って運賃安くさせるための方便すよ」

ザックはこの二人との交渉時に、確かに『身体が弱い』というセリフと同情を誘うような言葉を聞いた。

つまり騙す側も騙される側も、お互いが互いに騙し合っていたというわけである。

「程度はどうであれ、お互い様というやつだな」

口端を上げ、クラージェは鼻を鳴らした。

ザックは冗談じゃないと思った。これのどこがお互い様なんだ、と。こちらは襲撃担当の仲間が皆殺しにされているんだぞ。

彼はクラージェの発言に怒鳴り散らしたかったが、どうにかそれを抑えた。抑えなければ容易く殺されてしまうから必死に堪えた。

奥歯をぐっと噛みしめながら二人を伴って獣道を進み森を抜けると、凸凹の草原にある窪地から、光が漏れ出しているのを発見した。あそこがアジトだ。

ザックは二人にあの洞窟が自分らのアジトだということを告げた。

その入り口と思しき穴の前には、人が二人いた。見張りだ。

「ふうん。ヨロイさん、あの見張りは私がやるよ」

ザックがクラージェを見ると、その手にはいつの間にか、甲冑をつなぎ合わせて作ったかのような身の丈を優に超える大弓が握られている。しかもその規格外のサイズに見合うだけの、ランスのような巨大な矢も添えられている。

ザックが呆気にとられる間もなく、クラージェは番えていた矢を放つ。

彼女の大弓から放たれた矢は、寸分違わずに獲物へと的中した。

ザックは起きた惨事に目を剥いた。矢を射られた見張りの男は、立ち尽くしたまま腰から上が吹き飛んでいたのだ。

突然の惨劇に、見張りの片割れは呆然としている。

クラージェはその隙にもう一度矢を番え、放つ。この時、彼女は自然に己の口が弧を描いたことに驚愕した。

片割れ同様に、上半身が吹き飛んだ見張りを確認すると、クラージェは頭をぶんぶんと左右に振った。

「やばいだろ、今のはさすがに。俺はサイコパスなんかじゃない、サイコパスなんかじゃ……あれ、俺？　なんで『俺』なんて言葉遣いしてるんだろう。『私』、だろう」

己のことなのに己のことが理解できない。クラージェは頭上にハテナを浮かべて首を忙しく傾げた。

「お見事。……あれ？　クラージェさん、どうかしたつすか？」

「いや……なんでもない」

顔を覗き込んできたヨロイから視線を外す。

クラージェは重大な事実に気付いてしまった。だが、今ここでヨロイ一人に言ったところであまり意味はない。

まずは気に入らない野盗どもを皆殺しにすることが先決だ。

婦女を攫うなど、同じ『女』として許せん。王たる己の許可なく醜行をはたらくとは、いったい何様のつもりだ。

今のクラージェは、傲慢な感情に支配されていた。そしてその感情を鎮めるには、そういった感情にさせる元凶を絶たねばならない。

見張り二人が死んで数分もしないうちに、埒の辺りが騒がしくなってきた。

「さて……。ザック」

「は、はいいー！」

急に声をかけられ、ザックは間拔けな声を上げて肩を尖らせた。

「お前たちのアジトというのはあそこでいいのだな？」

クラージェはそう言って窪地を指した。

ザックはぶんぶんと必死に頷いた。

ならば、あそこに巣食う者たちを消せば、このイライラをどうにかできるだろうか。

「じゃあ、とっとと終わらせましょうよ。それで早く宿に戻って、晩御飯、晩御飯」

グロテスクなものを見ておいて、よく晩飯などと無邪気にはしゃげるものだ。

ザックはヨロイの浮かべる、眩しいほどの笑みに恐怖した。

「そうだな。こんな下らない連中は、とつとと始末した方がいいだろう。もちろん、道中のゴミ掃除も抜かりなく……な」

ぎろり、と黄金の瞳がザックの顔を捉えた。

「ひ——！」

叫び声を上げるまもなく、ザックの首は地面を転がった。

ザックが視界に捉えた最後の映像は、刀に付着した血を払って納刀する、亡者の姿だった。

洞窟内はランタンが等間隔に吊るされており、その内部は二人がイメージするものとは程遠く、明るかった。

奥の方で男たちが木で出来た粗末なバリケードからこちらの様子を窺っているのが見える。そして、その手にはボウガンが握られている。

(クロスボウか……しかもお粗末な劣悪品)

男たちの持ったそれを一目見ただけで、クラーゲの警戒心は薄くなった。だが目などに当たったら、どうなるのかわからない。本当に失明する可能性もあるかもしれない。

クラーゲは万が一に備えて、全身フルプレート鎧を纏っているヨロイを自身の前へと置いた。

「撃て——！」

クロスボウの射程圏内に入った途端、バリケードに隠れていた男たちが一斉に顔を出した。次いで、風を切る音と共に飛来する幾多もの矢。

クラーゲはヨロイの真後ろに隠れることでそれを躲し、ヨロイはスリットを腕で覆うことで矢を全て防ぎ切った。

「な、なんだよあの鎧は……う？」

クロスボウの一斉掃射を受けても傷一つつかない漆黒の鎧に、男たちは戸惑いの感情に支配された。それでもその間が僅かなものだったのは、彼らが場馴れしているからだろう。

男たちの中から一人が身を乗り出した。

「くたばりやがれえっ！」

彼は勇敢にも剣を片手に、ヨロイの頭に向かって斬りかかった。がんつ、という鈍い音。彼の振り下ろした剣は、彼女の左手に握られたボード状の特大剣によって容易く防がれた。

まるで巨石を叩いたようだった。その反発を受け、彼はたたらを踏む。大きな隙だ。そこを突かれ、男は首に剣を差し込まれた。

特大剣を盾にしてからのカウンター。これらの一連の流れがあまりにも自然過ぎて、男たちは仲間が一人やられたというのに、その光景に見入ってしまった。

男を殺したことで僅かな、雀の涙ほどのソウルがヨロイに吸収される。

(なんだろう……この感覚)

ソウルを吸収した時、ヨロイはほのかな充足感を覚えた。そして、それに抵抗を感じないことに、己自身の異常に瞠目した。しかし、この充足感を抑えるのは勿体ないように彼女は感じた。

ヨロイは顔だけを後ろへと向ける。

「クラীগさん、お願いがあるんですけどいいですか？」

「なに？」

「ここはあたしに任せてくれないですか？」

「？……まあいいけど」

クラীগは首を傾げ、やけに好戦的なヨロイを訝しんだが、拒否する理由もないため許可を出した。

「バリケードを強行突破した後、奥の連中をお願いします。あたしの背へ」

クラীগはヨロイの背中にぴたりとくっ付いた。

行くつすよ、という掛け声の後、二人は一気に駆け出した。

ヨロイは勢いそのままにバリケードに突っ込んでそれを破壊すると、慌てて腰の剣に手を伸ばした男の首を撥ねる。

バリケードから姿を現した者は剣で刺殺し、隠れたままの者は特大剣でバリケードごと押し潰す。剣圧が暴風のように吹き荒れ、男たちはまともに剣を構えることすらできずに殺され、ソウルを食われてい

く。

煙焔を剣に纏わせるまでもなく、男たちはいとも簡単に全滅した。あまりにも早すぎる、いや、少なすぎる。十数人の男を殺したが、得られたソウルは200にも満たない。

スリットの奥から「ちっ！」という大きな舌打ちが聞こえた。

「足りない……こんなんじゃないよ」

血まみれの騎士の呟きに答える者は誰もいない。

ヨロイは小さくため息をつく、先行したクラージェの後を追った。



鋭い斬撃が頬を掠めて、赤い線ができる。

雑魚を駆逐し、歩を進めているときに放たれた一撃。その一撃を放った者に、クラージェは『大したやつ』だと素直に心の中で褒めた。

一方のその一撃を放った男は苦虫を潰したかのようだった。

だがそれはほんの一瞬。彼は一撃を放った刀を手元に戻すと、口を開いた。

「ブレイン・アングラウスだ。そっちの名は？」

「……ふん」

「名乗る気はねえってか」

クラージェはつまらなそうに鼻を鳴らすことで返事をした。

そして、さつき傷つけられた場所にそっと手を触れる。

(少しだけ……、ひりひりする……?)

それは紛れもないダメージを負った感覚だった。しかもそれは、野盗に心臓を貫かれた時やベアトラップに足を挟まれた時よりも痛み具合いは大きい。

そのことにクラージェは、ブレインに対して好感を持った。

「まあ、この私に僅かとはいえダメージを負わせたことは褒めてやろう。私の名はクラージェ」

「……聞かない名だな。それだけの力量があるのになぜ無名なんだ？

それとも——」

ブレインはそこで一拍置く、クラージェの腰に差ししてある刀に目をやった。

「南方——砂漠の都市の出身か？」

ブレインの問いに、クラージェは首を横に振る。

「なんだ、違うのか」

と、ここで彼は気づいた。クラージェは胸辺りが赤黒く染まっている。血だ。つまり、それほどまでの重傷を負っているのだと。

だが外見に反して、女は一切の苦痛や疲弊といった感情を見せていない。

なんでもありの魔法詠唱者マジック・キャスターですら回復魔法などを使おうと何をしよう、あのような状態でびんびんしているなど不可能だろう。

「おいおい、いったいどんなトリックだよそりゃ？　うちの連中も結構やるもんだと思ったんだがな、俺の勘違いか？」

ブレイン・アングラウスは飄々とした態度で軽口を叩きながらも、その視線は鋭かった。

気配と長年の勘からして、この女は『人間』だ。

あの傷を見た時、最初はモンスターヴァンパイア（吸血鬼の類）なのかと疑ったが、吸血鬼ヴァンパイアにしては血色もよく瞳の色も違うことから除外した。人型のモンスターは他に淫魔サキュバスや動死体ゾンビなどがあるが、どうもそいつらとも気色が違う。

故に、目の前の女は人間なのだという結論が彼の中で出た。

「ああ、勘違いだ。この傷は私の恥。お前らの仲間に見事に騙されてしまつてな」

「そりゃゴ愁傷様だな。だとしたら、なんであんたはそんな傷を受けて死なずにいる？」

クラージェの答えに、ブレインはなおさら訳が分からなくなった。

ブレインの問いかけに、クラージェは薄ら笑いを浮かべた。

「秘密だよ。よく言うだろ？　女は一つや二つくらい秘密を抱えているものだ、つてな」

（やはりか。この女はうちの連中が手に負えるような奴じゃない。あいつら、とんでもない者の逆鱗に触れちゃったか）



「……随分とでけー秘密なことだ」

襲撃の一報が入った時点で戦闘の準備は万全に済ませてある。

ブレインは武技『領域』を発動させると、油断なく刀へと手をかけた。

「居合の構え……ふうん」

ぼそりと呟いたクラージェは、おもちゃを見つけた子供のような目をした。

「どれ……お前の実力、この私が測ってやろう」

クラージェは少し声を弾ませて言うと、ブレインと全く同じ構えを取った。